

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

DePOLA でぽら 48

2016年

特集 地域の伝統技術を継承する



[地域の伝統技術を継承する]

●特集企画に寄せて



▲広島県安芸太田町／
先端に銅を加えて修理した鋏



▲福島県喜多方市山都町／
そば粉100%の山都そば



▲福島県三島町／
会津桐で製作する人気の桐製品



▲福岡県築上町／
幻の手工芸品「金唐革紙」



▲北海道置戸町／オクラフトセンター
一年間学んだ塾生の成果作品展



▲宮城県石巻市北上町／
「ワークつるがや」で制作される鞆製品



▲沖縄県久米島町／
伝統の久米島紬を織る
桃原さん



▲徳島県吉野川市美郷／
崩れそうな石垣の再生「石積み学校」



▲富山県南砺市／
五箇山和紙の新ブランド「FIVE」



▲長野県根羽村／
山へ間伐作業に向かう林業技能生

現在経済産業省が認定している伝統的工芸品は総計222件あるが、伝統的産業分野は、あらゆる地場産業が対象になるため、全国的にまとめられたデータはまだない。

本誌では、伝統的工芸品を含めて地域で長年製造されてきた伝統技術又は特産品が、現在どのように継承され、製造・商品化されているかを、後継者育成の立場を中心に取材した。

久米島紬のように400年の歴史を持つ伝統的工芸品もあれば、茅葺き屋根の修復や崩れ出した石垣の再生等、日本の歴史文化や景観・環境を保全するために、企業や団体等が技術者を養成しているものもある。

伝統の商品を制作するためには、原材料の生産や育成・確保からはじまり、様々な過程を経て、一つの作品が出来上がっていく。作り手にはそのための技術力と共に、伝統を継承していくという熱意と覚悟、忍耐力が求められる。

技術を指導する人、学ぶ人の長期間にわたる研鑽の日々、そして独立した作り手たちの楽しくも切磋琢磨する日々。これらをやや緊張しながら取材に臨んだが、皆さんモノづくりへの向学心と充実感を持ち、どの工房も明るい雰囲気満ち溢れていた。寡黙だが、とてもいい顔をして作業をしている。しかし研修生の生活は厳しく、一人前になっても工芸家として豊かに生活できる保証はない。手間暇かけた手作り品は高価にならざるを得ず、消費者にとっては気軽には購入しにくい。無関心層が増えているのも気がかりである。

それを打破するために、各所とも新しい感覚や生活提案等を取り入れた商品開発とPR、手頃な価格にする等の努力を行っている。若い職人の採用や市民・学生らとの体験交流等も新たな商品創造の機会となるかもしれない。

決して失ってはならない日本が誇る貴重な技術。いまこそ地域ぐるみで伝承に取り組み、身近にあって輝く存在になってほしいと願わずにはいられない。

[地域の伝統技術を継承する]

特集企画に寄せて——2

■地域産業発展の拠点として

- ・作り手の想いと技で、木の命が蘇る時
[オケクラフト](オケクラフトセンター森林工芸館) 北海道置戸町—4
- ・蚕から紬糸にして、染色、機織りまで
島民の暮らしと共に[久米島紬] 沖縄県久米島町——8
- ・北上川河口域の自然と共生しながら
葦原の育成と[茅葺き屋根]の修復 宮城県石巻市北上町—12
- ・蔵内家の栄枯盛衰物語
幻の手工芸品[金唐革紙]の復活 福岡県築上町—16
- ・人も森も元気な矢作川源流域
トータル林業をめざして 長野県根羽村——18
- ・15名が参加してハードな実習
天空の里で、[石積み学校] 徳島県吉野川市美郷地区—22



■移住して伝統工芸職人に——

- ・地域おこし協力隊員が地域伝統の技を学ぶ——26
若い力が受け継ぐ匠の技
[奥会津編み組細工] 福島県三島町 26
時代に合った新たな創作に期待
[雄国根曲竹の竹細工]
福島県喜多方市熊倉町 28
3名の隊員が蕎麦打ち修業中[山都そば]
福島県喜多方市山都町 29
- ・鉄に魅せられて鍛冶職人に
鍛冶工房[金床] 秋田和良(寄稿)
広島県安芸太田町——30
- ・新感覚の五箇山和紙を世界に発信
[FIVE]&伝統の復元
富山県南砺市五箇山——32



■平成27年度 過疎地域自立活性化優良事例

- ・「人を増やしたい」思いを行動とかなちに 鹿児島県垂水市[大野地区公民館]——35
- ・里山の恵みを五名愛と地域活性化に 香川県東かがわ市[五名活性化協議会]——36
- ・新鮮野菜を子供たちに、「ふるさとランチ」 広島県三次市[田幸ふるさとランチグループ]—37
- ・会津材を生かした暮らしの提案 福島県三島町[一般社団法人 IORI倶楽部]——38

■INFORMATION 39

[全国過疎問題シンポジウム2016 in なら]のお知らせ

[KENPOKU ART 2016] 茨城県北芸術祭

編集後記 奥付

「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体)からのネーミング。

過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地区で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいます。国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市地域が交流をすすめて、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」(でぼら)を発行しています。

●表紙写真

上左/奥会津編み組細工の製品(福島県三島町)

上右/木登りの指導を受ける新人の林業技能者たち(長野県根羽村)

中左/久米島紬で制作するバッグや小物入れ(沖縄県久米島町)

中央/石積みの技術を指導する高開文雄石工技師(徳島県吉野川市美郷)

右中/乳児にプレゼントする木の器「すくすくギフトセット」(北海道置戸町)

下左/葦材で茅葺き屋根を修復する職人たち(宮城県川崎町・ふるさと村)

下右/雄国根曲竹の竹細工をする保存会の人たち(福島県喜多方市熊倉町)





▲森林工芸館の工房で研修する塾生たち

一見何の変哲もない木材や板切れが、作り手たちの熱い想いと技で、命を吹き返したように美しい白い木肌と木目を蘇らせる。緑の風、吹雪の日の音や風景が凝縮されているような器。林業の町・置戸町が28年前に開設したオケクラフトセンター森林工芸館には、エゾマツやトドマツ等から作った個性的な器がところ狭しと展示されている。ここで研修して独立、生業としている作り手たちは20名を数え、今年も2名の研修生が入塾、先輩たちから指導を受けてモノづくりの基本を学んでいる。

「北っ子の白く器」でデビュー オケクラフトセンターの誕生

置戸町は北海道東部、オホーツク海に注ぐ常呂川の最上流部に位置する森と田園の町。昔から良質材の産出地として林業で栄え、森で働く元気な男たちの町として「人間ばん馬」や町民綱引き大会発祥の地として知られる。綱引き大会はなくなったが、力自慢の男たちが500kgの丸太を引く「人間ばん馬大会」は6月末の日曜日に開催され、北海道の夏の一大イベントにもなっている。

作り手の想いと技で、木の命が蘇る時 「オケクラフト」(オケクラフトセンター) 森林工芸館

●北海道置戸町
おけとちよう



▶ロクロで挽いた典型的なエゾマツの椀



▶曲げ輪の弁当箱とスプーン(富田純枝さん商品)



▶若い人に人気のコーヒーカップ、小物入れ



▶町で生まれた赤ちゃんに配られる「すくすくギフトセット」

置戸町が木工芸品の町としてオケクラフトを確立するまでには、地場資源の付加価値を高める生産教育を推進しようという施策と、それに応えた住民活動、外部の作り手たちの指導・交流があった。町では昭和55年より置戸町は木材の町である、生活の場にもっと木を取り入れようと18日を「木に親しむ日」にした。木工教室が開かれ、図書館には木に関する本が増え、やがて「ぶきっちょの家」と名付けた空き家に木工作业施設を設けて住民の工作活動が広がっていった。57年には新たな発展をめざして加工技術の研究開発をする地域産業開発センターがオープン、専任の職員も配置された。

講師を招いて講演会を行ってきたが、法政大学の清成忠男教授が「ぜびこの人を」と推薦したのが工業デザイナーの故秋岡芳夫氏だった。昭和58年に来町した秋岡氏は木工ロクロの導入をすすめる、時松辰夫先生(現アトリエときデザイン研究所主宰)による技術講座が開催されるようになった。エゾマツ、トドマツ等のアテ材(建築材には不向きだが、木目が密で木工素材として適した材)を使ってロクロで器を製作する、針葉樹でも乾燥や塗装等の特殊加工で、美しく丈夫な器類が製作できることを確信した。

時松先生が置戸町のエゾマツ等を使って製作した木工芸品は、58年11月に東京日本橋高島屋で「北の自然から生まれた木の器オケク

ラフト展」として開催された。町民の作品も併せて30種60点を出品したところ大好評で、追加注文を受け、雑誌等でも取り上げられた。このクラフト作りをしたのは、毎月時松先生から学んできた「森林文化研究会」の人たち。様々な職業や年齢の人たちが、置戸の生活や暮らしを見つめ直そうと活動をしてきた。

町が地域産業の活性化を図ることを目的に、地場産業振興資金融資制度を設けたことから、町の各地に工房が誕生していった。時松先生は、商品が競合しないように各工房に特色を持たせるよう配慮したという。技術指導、担い手の育成等の整備が進み、待望の工房を持つて専業で製作する人が現れてきたが、反面、思うように作れない、流通ができないため収入を得ることが出来ずに辞める等、工房の格差が生じてきた。

そのため、昭和63年にオケクラフトセンター森林工芸館を開設。町内で生産されるオケクラフトを一堂に会して見て買うことが出来るようになり、木工技術の研究開発、作り手の育成、流通販売の拠点となった。

素材・デザインの多様化で 新たな食文化を提案

オケクラフトセンター森林工芸館は、街の中心部に近い公園緑地の中にあり、木製のフクロウが迎えてくれる。同館の隣には、共同工房、どま工房が建っている。

オケクラフトは郷土の基幹産業を教育の視点で捉えてきた経過から、教育委員会の所管として運営し、五十嵐勝昭館長は7年ほど同館に勤務している。

「でぼら」では過去に2度取材したが、1階の展示室はさらに木工芸品が増え、作り手に別々展示されている。ロクロ製品を代表する椀や小物入れ、皿等の他に、コーヒーカーップや曲げ輪、花卉入れ、スプーンやフォーク等も製作され、エゾマツ、トドマツ以外に、カバやセンなどの材が用いられている。

2階のガラスケースの中に、工芸家秋岡氏、時松先生らが手がけたオケクラフト初期の商品が保管されている。「当初製作されたものが原点ですが、大型のボールやお盆などは、工作に適した大きなエゾマツの木が不足し、もはや貴重品になりつつあります。白い木肌、が代名詞ですが、最近はセンやカバ、タモなどの広葉樹材による商品も増えました。椀や皿の他に、コーヒーカーップや曲げ輪などが人気です」と五十嵐館長は言う。

マスコミでも話題になった、学校給食にオケクラフトの器を使う施策は現在も続けられ、さらに町で生まれた乳児には、トレーから離乳食用の小皿、スープ皿をセットにした「すくすくギフトセット」(約2万5千円相当)がプレゼントされる。ここにいるだけで、木のある生活の豊かさ、温かさが満喫できる。

町内にはオケクラフトの工房が20ある。辞めた人はわずかで、木に魅せられた塾生はさらに感性と技術を高めて活動しているようだ。販売について五十嵐館長は「ホームページで商品カタログを見ることは出来ますが、ここへきて商品を手にとって購入していただきたいというのが本音です。一見同じような器でも一つ一つ木目が違います。手に触れて納得して購入していただければと思います」

ほとんどはオケクラフトセンター森林工芸館で展示販売しているが、最近は注文が追いつかず仕事がオーバー気味の作り手もいるようだ。

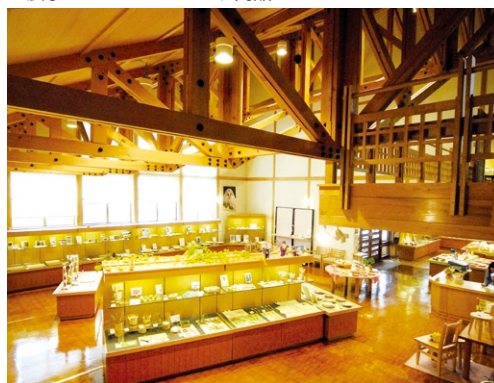
現在、販売、素材の調達は平成27年に設立した、「(社)おけと森林文化振興協会」が町からの業務委託を請け運営しているが、指導者も作り手も高齢化してきているため後継者育成が急務だと、昨年から現役作り手の指導体制による「オケクラフト作り手養成塾」を再スタートさせた。



▲「商品を手にとってほしい」と語る五十嵐勝昭館長
▼20人の作り手の代表的な商品を展示



▲オケクラフトセンター森林工芸館の建物
▼展示されているクラフト商品



自分の道具を作ることから

オケクラフトセンター森林工芸館では、ショップの奥が塾生の工房になっていて、ガラス越しに作業風景が見学できる。

現在、昨年入塾した塾生3名と今年入塾した2名が作業しており、3人の講師が指導に当たっている。木材切断機やロクロ、研磨機等の各種機器に加えて、木材も様々な形に切断されたものが揃っており、学ぶ環境としては申し分ない。

昨年入塾し、成果展に合わせて数々の商品を作ってきた3人は、旭川で木工加工の仕事をしてきたがロクロをやりたいと入塾した松本佳悟さん、帯広市出身で元管理栄養士の長谷川香奈さん、札幌市でのサラリーマン生活を辞めてきた石川順さん。「材料を見極めて最高のものを作りたい」(松本さん)、「女性ならではの感性を生かして寄木の食器に挑戦中」(長谷川さん)、「木の優しさや奥深さを知った、その表情を作品に活かせたら」(石川さん)と、クラフト製作の魅力を語る。1年間の研修を終えた塾生は、同所でもう1年学び、さらに隣接した共同工房で作業できる。共同工房には工作機械が一式揃っており、自分の工房を持つまでの間、自由に利用できる。

今年入塾したのは、養護学校の先生をしていたが、45歳を契機にモノづくりの夢を実現したいと入塾した畠法子さん、東京でグラフィックの仕事をしていたが地元活性にもつなげたいという湧別町出身の鈴木美里さん。2年間の研修期間中は、材料代や指導料は無料であるが、生活費は自分持ち。そのため、



▲ロクロ製品を極めたいと松本さん



▲ツートンカラーで女性らしさを、長谷川さん
▼今春入塾した鈴木さん、畠さん



2人は借家に住み、研修に余念がない。

その日午前中は、志鳥光一講師が皆を連れて、中古の工作機材を見に出かけたという。独立には欠かせない機器だが、一機数百万円するものもある。どこかに中古の売りがないかと志鳥さんは目を光らせているようで、さらに独立するための各種資金制度の活用をアドバイスしている。

「研修中でもよい商品が出来たら納品を進めています。1日も早く安定した生活ができるように、1年間で一人前にすることが我々の役目です」と志鳥さんは語っていた。

午後は先輩が新入生に、木板に製作予定の器の図面を描き移す方法を指導していた。工芸には数学的知識が必要のようで、皆の表情が一段と真剣だ。

驚いたのは、ロクロに当てて木を削る金属ナイフや特殊カッター、細部を削る用具等は、すべて自分たちで製作するのだそうで、鋼を火打ちして刃物に仕上げる鍛冶体験もする。

そう言われて見ると、それぞれがユニークな用具を持ち、磨きをかけて大切に使っていた。なお、共同工房の先にある「どま工房」は、

秋岡芳夫氏が収集した手道具や生活用品等18000点を「日本の手仕事道具」として収集・展示していたが、現在は企画展の時だけ公開されており、普段は木工体験・研修会等に活用されている。

独立して特色ある商品を製作

翌日は、工房を持って独自の商品製作を手掛けている若手の作り手2人を訪ねた。

今年3月に念願の工房『くつろ木』を開設した佐々木寛之さん(40)。平成24年に札幌市での会社員生活を辞めて塾生になり、主としてシラカバ材による花卉用器や皿、盆等を製作している。工房を建設し、中古機を一式購入すると約1千万円かかるため、国の融資制度等を利用している。

工房は自宅の隣に建設された。広い床にはシラカバの木の丸太を切断したものが沢山置かれている。北海道のシラカバは本州のものに比べると幹が白く、肌がきめ細かく丈夫だという。何よりも嬉しいのは北海道に沢山自生しているため価格が安いこと。ただし業者

▶一年間学んだ塾生3人の成果展の商品。素晴らしい出来栄と好評だ





▲シラカバ材をくりぬく作業をする佐々木さん
▼乾燥中のシラカバ材と自宅「くつろ木」



やれと講師に言われ、必死で勉強しました。おかげで注文も多くなり、今やっと食べていけると思うようになりました」

5年前に札幌市から二人の子供（中学3年、小学6年）を連れて移住してきた高田さん。会社の事務をしていたのでモノ

勝山地区で『夕花野』という工房を営み、

シラカバ材を使う仲間と分担している。花卉用に30cmほどに切った材は冬期間を中心にゆっくり乾燥させる。このシラカバの内側をロクロでくりぬいて、外側の白い木肌を残して磨き上げ、底を張ると容器の完成。オケクラフトセンター森林工芸館が「作つたらすぐ販売するから」といつてくれるが、形を整え、白い表皮を上手に残して内側まで丁寧な磨き上げるためにかなりの労力が必要のようだ。

「シラカバというおなじみの木がこんなにも素晴らしい器や調度品になることに気付きました」と佐々木さん。長時間直に水を入れておくことはダメだが、そこに在るだけで高原の風が感じられる詩的で洒落な置物である。

自宅は両親が購入していたモダンな家で、奥さんのひとみさんはアクセサリを製作していることから、1階の居間に談話室を設けるとか。土日にはコーヒーも提供するそうだが、その日はひとみさんが外出中のため見学できなかった。

曲げ輪を中心に製作している高田純枝さん(39)を訪ねた。以前同地区で佐藤純一さん(現置戸町議会議長)を取材させてもらったことがあり、Uターンして家業の割箸製造業を手伝う傍ら「人間ばん馬大会」等の地域おこしに取り組んでいた。高田さんの工房は、佐藤さんの好意で廃業した割箸工場の一部を貸してもらい、内部を温かく改装したものだ。大量の古木が置かれる中に、木材の切断機、ロクロ、大鍋等の機器があり、天井には形成した曲げ輪を乾燥させている。オンコ(イチイ)を薄く板状に切ったものを80℃の湯で2時間ほど煮て柔らかくし、丸く形を整えて糊付けしたものを何度か乾燥させ磨きをかけ、底板を張る。続いて蓋の製作を始める。木目を生かした蓋が曲げ輪の命になるので、時間をかけて磨きをかける。曲げ輪の弁当箱は最近特に人気だというが、シュガーや菓子等を入れる小ぶりの蓋付き曲げ輪も大変魅力的で、テーブルに彩りを添えそうだ。

「曲げ輪は3つの部分から成り立っているの

づくりの経験はゼロだったが、見学に来て工芸品を見た娘さんが「ママ、この仕事をしたら」と背中を押してくれた。

曲げ輪作りにはどの木がいいかを端から調べ、トドマツが曲げにくいことも知った。オンコがいいが、入手量は少ない。だからいい材に出会うと、端材をスプーンに加工するなど余すことなく活用している。「節がなく汚れも傷もなく美しい木目のある木を探すのは大変です。さらに、曲げには力がある上に、形成して接着して乾燥するプロセスはタイミングが必要で、毎日が涙、涙でした」と語る。

最近オケクラフトセンター森林工芸館から、曲げ輪の大量注文があり、朝4時起きで作業をはじめて夜は9時すぎまで製作する生活を数カ月続けた。「5年経ち、地域の人たちの優しさや自然の豊かさにも触れ、親子3人置戸町で暮らしていく決意を新たにしています」と高田さんは明るく語った。

文／浅井登美子 写真／満田美樹

●オケクラフトセンター森林工芸館 ☎0157-52-3170
http://www.town.oketo.hokkaido.jp



▲曲げ輪を手に、高田さん
▼製作中の曲げ輪製品とスプーンの数々





▲10人の養蚕係が24時間体制で育ててきた蚕。奥はまぶしコーナー



▲間もなく繭作りを始める熟蚕たち

日本の農村から消えてしまった養蚕が久米島ではしっかりと残っていた。蚕を育てて真綿から糸を紡ぎ、島に自生する植物で染色、経糸・緯糸に伝統の絵柄を配して織りあげる。気の遠くなるような労力を経て誕生する久米島紬。すべての過程を一人ずつが手作業で行うため、新人では二反織るのに半年以上かかることもある。だからこそこの伝統技術を学びたいと島にイターンしてくる女性たちも多い。久米島紬事業協同組合が運営するユイマール館には黙々と働く女性たちの姿があった。

幻の「お蚕さま」が元気に育っている！
7cmほどに成長した蚕たちが、整えられたシートに配られた新しい桑を美味そうに食べている。葉をつばむサクサクという音が室内に流れる。中には食べるのを辞めて上体を持ち上げ、繭作りをしようかと思案中の蚕もいる。隣には熟蚕した蚕が糸をはいて繭を作る回転式の「まぶし」コーナーがあり、小さな仕切りに真つ白い繭がぎっしり並んでいる。どこの部屋に入っても巣作りしようかとうろろしている蚕もいる。
こんな養蚕風景を見るのは40年50年ぶりだろうか。幼い頃祖母の家で見た懐かしい幻の風景。「お蚕さま」と呼ばれて愛され尊敬された蚕たちが、今でも島の女性たちの手で手厚く飼育されている。
養蚕は我が国の外貨獲得のための一大産業で、農家の貴重な現金収入であったが、昭和30年頃には急激に姿を消していった。それが



▲桑の葉を食するのを辞めた蚕は、回転まぶしで巣作りの場所を探し、糸をはいて2～3日で体を包んで繭になる



▲沖縄固有種の黄色い繭

蚕から紬糸にして、染色、機織りまで 島民の暮らしと共に「久米島紬」

●沖縄県久米島町



◀久米島で最も高い地にある国指定史跡の宇江城城跡。360度視界で久米島が一望できるる要塞

久米島では、琉球時代より飼育されてきた小粒で黄金色をした蚕も約1万頭飼育され、すでに金色の繭になって、紡ぐ時を迎えている。沖縄特有の艶のある黄色だが、糸が短く紐ぎにくい欠点がある。白い繭は糸を練りやすいが、糸50本位をより合わせて絹糸一本が



▲青磁破片が出土する等、琉球王府時代の交易を今に語る具志川城跡。国指定史跡

戦後は、しばらくは養蚕どころではなかったが、このままでは伝統の地域産業が廃れて

ここ沖縄・久米島にはしつかり残っている。ガラス張りの広々とした養蚕室は25℃に保たれ、台にシートを敷いた上で春と秋の2回、2万頭の蚕が飼育されている。愛媛県の養蚕試験場から届いた蚕の卵は久米島へ来て孵化して3mm程の蟻蚕になり、細かく刻んだ若葉を与えて飼育する。一ヵ月ほどたつと幼虫になり、4回眠り4回脱皮して5齢と言われる成虫へ。飼育には10人の女性が当たり、糞と食べ残した桑を処理しながら、水気を取りのぞいた新鮮な桑を3時間置きに与えている。

出来上がるため、糸を一反織するには繭が2700匹も必要だという。島で育てた繭は、真綿にして緯糸に使われ、経糸には生糸が使われる。

久米島繭を島の税の代納品として

「琉球国由来記」(1713)には、14世紀頃久米島に漂流してきた中国人から養蚕について知った堂之比屋が、自ら中国へ渡って養蚕技術を学んできたと記されている。15世紀頃には桑の栽培法、真綿の製法が伝授され、友寄景友により糸の染め方や繭の織り方等の技術が飛躍的に進歩したと言われる。

しまうと危惧した旧仲里村を中心に久米島紬工業組合(後に事業組合)が作られ、婦人会を対象にした講習会や共同作業場、女子工芸学院を開設して、蚕の飼育と染色、機織りを再開すると共に、販売にも力を入れていった。久米島繭は昭和52年に沖縄県指定無形文化財に、平成16年に国指定の重要無形文化財に指定され、翌年に現在の施設の前身である久米島伝統工芸センターが開設した。



▲展示資料館を訪れた人に説明する松元理事長
▼島にある植物を使ってこんなに美しい色に染まる



▼伝統的な色と柄で人気の久米島紬。最近は若いデザイナーも増え、バッグや小物、スカーフ、洋服等も人気



織子で生活していくのは大変だが

島の東部地区にある久米島紬の里には、久米島紬事業協同組合事務所と展示資料館、織子たちの共同作業場ユイマール館がある。バスで見学に来た人たちは松元徹理事長の案内で、ビデオで久米島紬の概略を学んだあと、展示室で伝統の紬製品を見学していた。久米島紬伝統の柄や模様の和服の中に、紬生地で作した洋服、バッグや小物等があり、土産品として人気ようだ。

見学者のガイドを終えた松元理事長とお会いして、現在の概略を聞かせていただいた。

「現在島には織子が約100名いて年間600反ほど生産しています。一反織るのに半年せいぜい年2反という新人もいますが、ベテランだと16〜20反は織ります。ここは織子の研修機関で、優れた久米島紬を織れるように指導し、必要な材料や機材を揃えて作業できる環境を提供しています。伝統工芸士の資格を持つ女性が10数人いて、新人たちの技術指導に当たっています。」

しかし織子として一定の収入を得るのは大変です。すべての作業をマスターして個々で織りあげなくてはならない。織りあげた反物は組合が買い取りますが、その間の生活費は自分で工面しなくてはなりません。1ターンスて来たいという人も結構いますが、稼ぐために働くのではなくて、久米島紬の魅力と島の暮らしを楽しむために来てくださーいと言っています」と理事長は言う。

翌日は織子希望者の面接日で、面接を終えた一人の若い女性が展示館の椅子に座っている。

た。後で理事長に聞くと、東京外語大学在学中に織物に興味を持ち、京都の染織学院で学んでいたが、久米島の糸紡ぎから織柄のデザイン、染色まですべてを各自が行うシステムに興味があり、ぜひ入門したいということだった。無形文化財指定になると、生産品には伝統を継承した品質や精度の高さがより求められる。そのために商品はさらに高級化するため一般の人が身軽には買い求めにくい。そんな矛盾を、この取材でも感じる一瞬であった。

創造性に満ちた作業仲間と交流しながら

ユイマール館は明るく近代的な木造建物で、1、2階には機織り機がぎっしり、総40台配置され、その奥に染色室や糸作り室、洗濯場等がある。一反織りあげるのに50以上の作業があり、概略すると、何を織るかをデザインしたもの原寸大の紙に書き、糸に印をつけて「拵括り」を行い染色する。染色した糸を手でほぐして竹くだや木枠に巻き取り、いよいよ機織り機に向かい、経糸を綜統(織るとき上下する道具)に通し、櫛のようなオサに2本ずつ通す。息をつめて指に神経を集中させる作業である。

副理事長で伝統工芸士の山城智子さんがユイマール館を案内してくれた。実家は代々久米島紬を作ってきたので、織子になるのは当たり前だったが、伝統工芸士になるには資格が必要。12年働いたら受験の資格が取れるので、山城さんは学生の時から勉強をして合格したと言う。

染色室では仲田正子さんが、レンガ窯に薪



▶繭からとり出した純白の紬糸(真綿)



▶一反織るのに使用する染色した紬糸



▶染色をする仲田正子さん。大窯でサトウキビを煮出す



▶久米島紬事業組合経営のユイマール館



▶副理事長・伝統工芸士の山城智子さん。蚕からとった真綿(まわた)を手にする
◀藍色に染めた生糸を整える塩田史麻さん。大阪から移住してきた





▲染色しない部分にビニールを巻いて、木綿糸でしばって
いく作業



▲寸時を惜しんで糸巻き作業をする富永奈美子さん。
千葉県から移住。2人の子供のお母さん



▲巻きやすくするため糸をほぐす作業



◀中学生が体験教室で織り上げたコースター

▶「伝統工芸士で講師の一人、桃原禎子さん」久米島紬
ほど爽やかで模様の美しい生地は他にない。いつも心
底惚れて仕事しています」と語る。

を燃して大釜を沸騰させ、サトウキビの葉を煮出していた。薄茶色の染色液が出来るが、それに媒染剤を加えて緑色の糸を4反分用意するという。

仲田さんは二人の子供が巣立ったので神戸から移住してきて、織子になるための勉強を本格的に始めた。「久米島は緑が多くて自然が豊か。そして人がいい。世話好きで人情に厚いんです。先輩たちに学べるここでの作業が楽しみです」

琉球藍染をした生糸を整えている塩田史麻さんは母の実家が久米島、大阪からIターンしてきた。久米島には染料にする植物が豊富にあり、ほとんどが自生する植物。これらで染色したあと、鉄分を多く含んだ池の泥で媒染、染めと媒染作業をくり返す。久米島紬は黒褐色、赤茶色、黄色などの5色が基本だが、藍色だけは他所から仕入れている。

1階の機織り室では三々五々女性たちが働いていた。薄紫色の無地の生地を織る人、伝統的な柄模様を織るためにオサに糸を通して

いる人、今日は休んで織りかけの反物に布をかけている機もある。

「自宅で作業している人もいますが、大抵の女性がここへきて作業しています。一反織るのは大変なことで、ここで仲間に相談したりお喋りしたりしながら作業するのがいいようです」と山城さんは言う。

一人の女性が床に座って「緋くり」をしている。「私、昨年6月から始めましたが、覚えが悪くて不器用で一反がやっと。でも素晴らしい仕事なので続けていきます」と笑顔で答えた。近くでは子供が学校から帰るまでの時間に来るといふ富永奈美子さんが、糸撚りを行っている。多くの女性が家庭を持ち、ご主人や家族の協力で織子を続けているようだ。

1階では体験教室が開催され、コースターを織るための織機が数台用意されていた。この体験教室は小中学生から高校生が授業の一環として実施しており、いずれ何人かが未来の伝統工芸士をめざして入門するだろうと期待されている。

文／浅井登美子 写真／小林恵

●久米島紬事業協同組合ユイマール館 ☎098-985-8333



▶「ふるさと村」で遠野の民家の茅葺き屋根の修復作業をする井阪さん(左)と木下さん



東日本大震災で、家も田畑もすべて失った石巻市北上町。長年河口の葦原を保全して葦簀や茅葺き屋根の修復に取り組んできた(有)熊谷産業(以下熊谷産業)だが、津波は家屋敷や工場のすべてを一瞬に奪い、河川から葦原も消えた。しかし建築技術を駆使して別の工場の一角に仮設小屋を作り、炊き出しを始めるなど、いち早く復旧に当たった。壮絶な5年間を経て、葦も出荷できるようになり、茅葺き屋根の修復作業も本格化。屋根職人をめざす若者も増えている。

若手の茅葺き職人も加わって

北上川河口域の自然と共生しながら 葦原の育成と「茅葺き屋根」の修復

●宮城県石巻市北上町

仙台市の南部に位置する川崎町には、広大な敷地を持つ国営みちのく杜の湖畔公園があり、その中に東北6県の古民家を移築、復元した「ふるさと村」がある。釜房、本庄由利、月山山麓、南会津、鳴瀬川湖畔、遠野、津軽の古民家で、いずれも明治初期かそれ以前に建てられた貴重な建物で、茅葺き屋根が葺かれている。移築して10年以上経ち屋根のほころびが目立ってきた。そのため、管理する国土交通省東北地方整備局の依頼を受けて、熊谷産業が修復作業に当たっている。

釜房の家(宮城県川崎町の古民家)の屋根修復を終えて、現在は遠野の家の修復に取り組んでおり、屋根近くの高さに足場が設置されている。北上川川の葦原から刈り取ってきた葦が大量に運び上げられ、部長武山貞秋さん(熊谷産業・熊谷貞好会長の弟)の指揮の下、4人の職人さんが作業をしていた。茅葺き屋根は長年経つと水分が溜まって劣化していき、20年間ほどで葺き替えが必要になる。特に最近は何れも裏で火を炊くことが少なくなつたので、劣化が早いという。茅葺きには地域により、葦、ススキ、スゲ等が使用されているが、葦が一番丈夫で屋根



の風通しがよい。ストロー状の茎をもつ葦は隣り合う葦同士で溜まった雨水を持ち上げて素早く落とすという習性があり、一度葺いたら30年は大丈夫だといわれる。

茅葺き屋根の修復には、まず屋根を乾燥させること。そして杉板等を敷いてから、葦やススキを重ねて固定し、下から上に向かって分厚く重ね合わせていく。

今回作業している遠野の民家は、全面葺き替えではないので作業は比較的楽だというが、移築民家の中ではかなり大きな家なので、作



▶上/軽々と葦束を担いで作業する井阪さん、木下さん
下右/劣化した茅を取り除き、新しい葦を差し入れる
左/熊谷産業の茅葺き屋根職人5人組。中央が武山部長



▲北上川河口で葦原の様子を語る熊谷貞好会長

業は数か月間必要とのこと。

屋根の天辺近くで作業しているのが井阪智さん(30)と木下愛理さん。二人は新人職人で、井阪さんは横浜育ち、早稲田大学物理学部を卒業後、農業に興味をもって高知県で働いていたが、茅葺き屋根を修復する職人の仕事ぶりに感動して、3年前に入社した異色職人。「これからも続けていきます」と語り、身軽に動き、慣れた手つきで葦入れの作業をする。

木下さんは三重県伊勢市の出身。陶芸をしてきた関係で葦を使った和紙や壁紙製作をめざしているが、「茅葺き職人としての腕も磨きたい」と一年前から屋根に登るようになり、「ま」と日焼けした笑顔で語る。葦を井阪職人に手際よく渡すことが目下の仕事のようにだ。

二人を支えているのが、この道20年の大槻寿さんと佐々木一郎さん。「一人前になるには10年かかるので、若い職人を育てるのも大切な仕事。うちの会社は家族的で、新人の福利厚生もいいよ」と大槻さん。劣化が進む北

側の屋根で葺き替え作業を行っていた。

社員は皆で一台の大型車に乗って北上町を早朝に出発、1時間余かけて川崎町の現場に到着し、夕方には北上町に帰ってくる。それがまた楽しく、新人職人には先輩から学ぶいい機会になっているようだ。熊谷産業は、福島県や東京都下でも葺き替え作業を行っており、作業員は嘱託を入れて20名、日本の伝統技術を学びたいという2名の外国人職人もいる。

あの日、北上町は――

北上川の葦原を案内してくれながら、熊谷産業の熊谷貞好会長はゆっくり語った。

「あの日、北上川対岸で作業していた地震7の地震に見舞われました。津波が来ることを親たちからも聞いていたので、すぐ船に乗って家に近い岸まで辿り着き、会社へ飛び込むと皆に『何しろ早く家族と山の方へ逃げろ』と叫びました。幸い当社では死傷者ゼロ、全員が助かりました」。そのあと「でも、石巻市の病院に入所していた妻はどこへ運ばれたか不明で、一週間ほどして仙台の病院にることがわかりましたが、間もなく亡くなりましてね」とぼつり。

「でぼら」では10数年前に熊谷産業を取材させていただいた(27号)。当時熊谷貞好社長がガイドしてくれた葦原には3mもある葦が一面に生い茂り、夕方にはシジミ漁をする地元の人たちの船が帰ってきて、河口は大賑わいしていた。

東日本大震災で、北上川は流れてきた廃材で埋め尽くされた。河川はいまようやく静か

な元の姿になり、再び葦が生育し始めたが、面積はかつての1/3になり、地盤沈下したため生育が遅く、丈は2m以下。会社の代表取締役を三男の熊谷秋雄氏に譲った貞好会長は、災害時に受けた傷や骨折、改修時の肉體労働等で足腰に障害が残っているが、毎日河川敷を歩いては葦や野鳥たちに挨拶している。「自然が何よりも大切です。しっかりと守っていかないと」と語る。

国道から一步下がったところに田畑や家々があり、街の入り口辺に熊谷産業があった。手入れされた広い庭園の中に大きな家屋敷や工場、葦納品庫があり、屋根には石巻特産のスレート屋根が敷かれ、茅葺きの離れもあった。社員が数人、葦を整えて束ねていた。

そこを6m以上の津波が襲い、収穫したての葦が2つの倉庫一杯に積まれていた本社工場や熊谷家の歴史的建造物はすべて喪失した。あとは、茶褐色の荒野。その中に葦の束が三々五々突き刺さっていた。後に、葦やスレート瓦を拾い集めて活用したという。

北上町では6割の家屋が全壊または半壊した。今その地は「災害危険地区」指定を受けたため、同社では住まいのあった場所には木造の巨大な倉庫を建設、自宅や工場は橋浦の



▲上/十三浜の復興住宅で、武山さん
下/災害で死去した子供や住民を祀る慰霊碑。
いつも生花が絶えることがない

元葦の手漉き工房兼従業員宿舍のあった場所へ新設した。

東日本大震災は、石巻市では死者・行方不明者が3745名、うち北上町は276名が犠牲となった(2012年2月時点)。海岸に近い十三浜町にあった北上総合支所は6.5mの丘の上に建ち、住民の避難場所に指定されていたが、大津波が建物を飲み込み、54名が死去した。隣接する北上小学校でも児童7名と先生1人が亡くなり、現在は廃校となったその地に慰霊碑が建っている。

ガイドしてくれたのは、災害復興の諸活動をするNPO法人「りあすの森」(理事長/熊谷秋雄氏)の運営をしている武山文衛さん。元役員職員で、「りあすの森」の顧問・相談役でもある。

「対岸にある大川小学校は多数の児童が犠牲になったため今も話題になっていますが、当地でも多数の人が亡くなったことを知ってほしいのです」と言う。

「石巻市は平成17年に1市6町が合併して新石巻市になりましたが、市の北東部にある北上町は昔から住民の自治意識が高かった。震災の時も救援隊は当てにできないと、皆で助け合った。中でも熊谷産業さんがいち早く

工場の前庭にモンゴルの避難場を設け、炊き出しもしてくれた。建築技術を生かして仮設住宅も建ててくれて、皆の集う場を設けました。間もなく若者が中心になり『地元に住む』活動がはじまり、各地から学生らが応援にも駆けつけてくれました」

武山さんが太平洋を一望する丘の上に出来た復興住宅へ案内してくれた。工学院大学が

出資してくれ、地元木材を使って建設された11棟からなる住宅地で、漁師さんの新居にと提供してくれた。別荘地のようなお洒落な木造住宅で、いまは移住者や若い家族にも人気だという。海辺には公園も新設されたが、住宅がないため、かつての漁村の賑わいはない。「災害前の人口は3904人だったが、現在は2688人。さらに過疎化が進んでいます」と武山さんは言う。

代わって橋浦の市街地に大半の家が新居を構えるようになった。家屋損失の補助金としては、一戸300万円。新たな家の建設にはほど遠い金額だが、「この際皆で頑張ろう」と新しい街づくりが進んでいる。周辺の田では田植えが終わり、カエルの声も聞こえる初夏だ。しかし一歩市街地を出ると、道路は行き交うトラックで溢れ、各地で大型プロジェクトといわれる工事が行われている。熊谷産業の倉庫の先にも、20棟のガラス張りの温室を建設中。「国営の植物栽培工場が出来るといいよ。オランダの企業が請け負っているそうで、どうして日本じゃないのかな」と近くに小さい車庫を持つ男性が不満顔で説明してくれた。

廃材と葦を使ってモダンな新社屋に

市街地の一角に、新設した熊谷産業の事務所兼工場があった。びっくりしたのは屋根から壁まで、工場建物のすべてが葦で葺いてあること。グレー色の円やかな質感の建物は、近づいて見ると葦を巧みに組んだもので、精巧な技術に圧倒される。夏は涼しく冬は暖かくて暖房なしで作業が出来るとか。

隣接する事務所は、災害時の木材も使った



▲倉庫内に運び込まれた古民家の材や調度品の中で、熊谷秋雄社長
▼倉庫の建つ場所には、災害前は自宅や工場があった。
現在、奥では国営の植物栽培工場が建設されている



▲葦で全面を葺いた新工場
◀天然スレートで作ったオブジェ(左)
葦の和紙で作ったランプ(右)



モダンな木造建築。葦で製作した和紙が壁紙やランプ等に活かされ、庭には天然スレートによるオブジェもある。

「東京駅丸ノ内駅舎の改築では、スレート屋根を当社が葺く計画でした。震災のためスレートの多くが喪失し、皆で地面を掘って埋まった瓦を集めるなど大変でした」と社長。

北海道の大学を出た後、海外青年協力隊で3年間外国暮らしをした。その時、日本では消えていく一方の茅葺き屋根や古い民家が、ヨーロッパでは大切に保存されていること、地域の天然素材を生かした住居や工芸品を上手に生かしていることを学び、父親の会社を手伝おうと思った。父親に頼まれて6年前に社長に就任した。

「日本の伝統美を誇る、重要文化財等屋根工事一式」が熊谷産業の事業で、材料となる良質の葦の生産と丁寧な仕事ぶりが各所から注目され、打ち合わせ等で超多忙な日々を送っている。「震災できれいさっぱりモノが無くなり、身軽になったと思いましたが、逆に人が集まってくる、モノも集まってくるようになりました」と苦笑する。

社長に元住居跡地に建設した倉庫へ案内してもらった。自分たちで施工したという体育館並みの巨大な木造建築である。「外側のスギ板はもう少し焼きたかった」と言いながら鍵を開けた。中には、知人から預かってくれた持ち込まれた民家の太くて大きい柱や梁材、祭り用具、外国映画に登場する四頭馬車、そして北上川に浮かべる葦で編んだ船や葦刈機等がところ狭しと置かれている。

「どれも貴重なものばかりで、整理するわけ

にはいきませんね」と苦笑とため息。社長や会長の人望の厚さを垣間見るようだった。

今後の計画は、葦原を従来のように拡大して品質の良いものを生産していくこと。全国の葦の生育地は渡良瀬遊水地と青森県岩木川流域、北上川河口にしかない。管理する国土交通省の人は、「放っておいても茂るでしょう」というが、手入れをしないと枯れていつてしまう。春先に葦原を焼くことで新芽が生えてくるし、冬に刈ることで翌年も育つ、そして残った葦をチップ状にして葦原へ入れることで土地を豊かにする。その手間は相当だが、何の植物も生えず汚れていた北上川に拡充工事を申請して、河川を美化しながら、時間をかけて葦原を育成してきた父親や周りの人々を見てきた社長は、葦原の育成を継承することが重要な仕事。そしてそこで働くことが楽しく充実した時間のようだ。

楽しく丁寧に、葦製品の製作

仙台市の社会福祉法人仙台つるがや福祉会が運営する「ワークつるがや」が、熊谷産業から届いた葦を使って葦製品を製作・販売していると聞いて尋ねてみた。

宮城野区鶴ヶ谷にある知的障害のある人が集い、生産活動の機会を提供する施設で、1階のレストランには葦で作った葦簀、モノ入れ、額ぶち、コースター等が並べられている。迎えてくれた副施設長の片平幸代さんは、「葦の皮をそれはそれは丁寧に剥いて、きれいに磨き上げてから作っています」と言って、作業現場へ案内してくれた。

10人ほどの若い男女が机を並べ、女性たち

は葦を一本一本手にして皮を剥いている。そのあと布で丁寧に磨くと、茎は艶のある美しいクリーム色になる。

これを指導者も手伝いながら、大きさや節の状況に合わせて組み上げて、様々な製品を製作していく。手前では、男性が葦簀を編んでいる。台座に長めの葦を一本ずつ置き、重石をつけた麻糸を回す等、美しく編んでいく。葦のすのこは、強い日差しをさえぎり、自然の風合いを醸し出す優れたもので、丈夫だから長期間使用できる。葦囲いのくずかごや新聞立て等、素朴な味わいが人気だという。葦の先端に細かい切目を入れて筆風に仕上げた「葦ペンセット」というユニークな商品もあり、買って帰り、暑中見舞いのハガキに使ってみたいところ、素敵な絵文字が書けた。

文／浅井登美子 写真／小林恵

▼左/「ワークつるがや」で製作された葦製品の数々
右/葦を整えて商品作りをする人たち



- (有)熊谷産業 ☎0225-67-2045
<http://www.kayabukiyane.com>
- ワークつるがや ☎022-395-7966
- npo法人「りあすの森」 <http://www.riasunomori.jp>
- みちのく公園ふるさと村 ☎0224-84-5991



▲仏間の内陣に貼られた金唐革紙
(現存する国内最古品)
◀茶室より銅製の竹を模した
雨樋を見る
▶金唐革紙の部分



藏内家の栄枯盛衰物語 幻の手工芸品「金唐革紙」の復活

●福岡県築上町
ちくしょうまち

伝統工芸和紙で
外貨獲得も

本固有の伝統工芸和紙で作り「金唐革紙」として明治6年(1873)にウィーンで開催された万国博覧会に出品し、好評を博したのが東京・日本橋にあった紙屋の竹屋商店だ。その後、ヨーロッパからの注文に応じて量産するようになったため、明治政府も外貨獲得の殖産興業として取り組み、明治12年(1879)には大蔵省印刷局で「金唐革紙」の製造を始めた。しかし、官

◀上/藏内部の表門
下/国指定名勝の庭園から藏内邸を望む



▲復元された版木(旧藏内家に展示)



鳥居を潜り一直線の参道を突き当たると貴船神社がある。旧藏内邸の主だった藏内次郎作が帰宅した際、先ず貴船神社を拝んでから自宅へ入る構成になっているのだ。
築上町教育委員会の高尾栄市さん(53)に案内された明治39年建築の旧藏内邸仏間には漆塗りの仏壇が置かれ、壁全体が細かい木の实模様が浮き上がったえんじ色で、そこに金色の大きな花柄が立体的に浮き上がる花唐草文様になっている。和紙の手工芸品だが本物の革と見間違えうほどの「金唐革紙」である。「凹凸がしっかり出て、版木の先端まで表現できているのは良い時代の物で、きっちり刷毛で叩き込んで細部まで版木の模様を写し出してますよね」と、高尾さんが我が子を自慢するように説明する。

業の民業圧迫の声が高まり、明治23年(1890)には民間会社に払い下げたが、その頃から段々と品質が低下し、明治35年(1902)にはコスト節減による品質低下が指摘されるまでになっていた。「金唐革紙」製造技

穏やかな田園風景の中を城井川に沿って上流へ進むと、鳥居を潜って一直線に伸びる参道が突然現れる。明治時代から大正時代に炭鉱王と呼ばれた旧藏内邸へ続く道だ。九州でも最大級の規模を誇る旧藏内邸に、幻の手工芸品「金唐革紙」の壁紙を貼った仏間があると聞いて訪ねた。華やかな鹿鳴館時代の雰囲気か漂う「金唐革紙」を訪ねる旅は、安土桃山時代から始まる豊前宇都宮家の重臣だった藏内家が辿った栄枯盛衰の歴史を映し出す。

500年ほど前からヨーロッパには、なめた牛革に金属箔を貼り、金型を使って模様を浮き上がらせて彩色した壁画装飾の革工芸があり、宮廷や寺院の壁を飾っていた。明治時代始め、我が国にも「金唐革」という名称で持ち込まれ、袋物や小物に仕立てられたが非常に高価で一部の愛好者に人気だった。その「金唐革」のように見える壁材を、日



術は、時代の波に押されて衰退し、昭和初期には消滅してしまっただ。現在、「金唐革紙」を貼った壁が残っているのは、全国で10カ所余しかなく貴重な文化財となっている。

上田尚氏の指導で ワークショップを開催

旧日本郵船小樽支店の修復工事が始まった昭和59年に、現存する「金唐革紙」から製造工程を復元しようとした技術者の一人が、金唐紙研究所代表の上田尚氏だった。

平成25年4月から一般公開を始めた旧藏内邸でも、国指定名勝の庭園や九州で最大級の規模を誇る木造住宅だけでなく、文化財として貴重な仏間の「金唐革紙」の技術復元にも取り組むため、上田尚氏に協力を求めた。調査した上田氏から「鹿鳴館時代の版木を使った精巧なもので、大胆な構図の花模様は目を見張る」と、お墨付きを得ている。

平成26年に上田氏の技術指導を受けた後も、毎月一回技術復元のワークショップを続けている。

仏間の「金唐革紙」から逆に版を起こし、幅90センチ直径15センチの桜木で円柱形の版木を作った。和紙は、織維の丈夫な楮紙と表面が滑らかな三椏紙を貼り合わせて原紙とし、これに錫箔を糊付けする。それを湿らせて版木に当て、豚毛の刷毛で数時間も強く叩き、細かい模様を浮き上がらせていくのだ。

「この工芸品の真骨頂は錫箔を使うことなんです。錫箔にニスを塗ると金色になって輝くんです。金色にしただけじゃ面白くないから、地模様は漆絵の具なんかで塗るんですね」

と、高尾さんは手品の種明かしをしたように得意顔だ。

旧藏内邸で月一回開催される「金唐クラブ」のワークショップを覗かせてもらうと、和やかな雰囲気の中にも真剣さが漂う。この日は、企画した高尾さんを含めて4人の参加だ。

「美術の先生が技術を持っているので、力になってくれる」と、ワークショップを始める時に高尾さんが声を掛けた美術の先生たちだ。紅一点の木村康子さん(58)は先生ではないが、「何か趣味があつたらいいなと思つてたところ

ろに声を掛けてもらった。(金唐クラブから)見捨てられんように10年間頑張る」と、意欲的。山本栄次さん(54)は「工芸的なものに関心があつたところに声を掛けてもらった」と、黙々と筆を動かしている。末吉眞二さん(63)は、自分の筆と水性漆の絵の具を持参してや

つて来た。心構えが違うのだ。それぞれが自分のペースで、気負わずに金唐革紙の復元を楽しんでいる。「金唐クラブ」で作った小さな金唐革紙は「葉」として、旧藏内邸見学の記念に販売される予定である。

旧藏内邸がある築上町の城井谷は、鎌倉時代に城井城を築城するなど勢力を誇った豊前



▲金唐革紙ワークショップで古色を塗る



▲版木に和紙を打ち込む時に使う豚毛刷毛



▲完成した作品



▲作品を点検する高尾さんと木村さん
◀金唐革紙ワークショップの様子

宇都宮氏の本拠地だった。豊前宇都宮氏家の重臣を務めていたのが藏内家である。安土桃山時代に豊臣秀吉の参謀で中津の大名となつた黒田孝高(官兵衛)の嫡男長政にだまし討ちに遭つて豊前宇都宮家が滅亡すると、重臣井谷の庄屋として勢力を維持し続けていた。19歳で庄屋を継いだ藏内次郎作は、持ち前の才覚で炭鉱経営者として成功し、生産量全国9位の石炭会社で成長させ、炭鉱王と呼ばれるようになる。炭鉱王の財力が無ければ、旧藏内邸の「金唐革紙」を貼つた仏間も無かつたことだろう。

城井谷を歩くと、安土桃山時代から続く豊前宇都宮家と藏内家にまつわる栄枯盛衰の物語を辿ることが出来る。

写真・文/芥川 仁

- 福岡県築上町教育委員会文化財保護係
☎0930-52-3771
- 旧藏内邸(水曜日休館)
☎0930-52-2530

人も森も元気な矢作川源流域 トータル林業をめざして

長野県根羽村



▲杉の伐採を行う森林技能職員。左から新入社員の渡辺さん、飯島さん、竹村さん、ベテランの橋本さん、加藤さん、石原技術指導員

経済的・人的交流が深い。

根羽村は総面積89・97km²だが92%が林野面積。うちスギ、ヒノキ等の人工林が73%を占めている。全戸が林業を生業としてきたが、近年は木材の低迷もあって、山仕事をしたことのない若者が増えてきているようだ。そのため森林組合が伐採・加工・販売までを一貫して行う「トータル林業」をめざしている。

根羽村は南信地区の名所、天竜峡や昼神温泉の南にあり、矢作川沿いに走る国道からは田植えを待つ田圃が青い空を映し、周りの森は新緑でむせかえっていた。

森林組合事務所では参事の今村豊さん(56)が待っていてくれて、2階の会議室へ案内してくれた。根羽の木材を使った部屋は木の香りと温かい色調にあふれている。

今村参事は約20年勤めた長野県林務部を退職して根羽村森林組合に入社した。生まれは東京新宿、山登りが好きだったため信州大学を出て県の林務部に就職した。

「林業改良指導員として各地を回っていて、根羽とも10年ほど付き合いがありました。豊かな森

三河圏を経て信州への玄関口

三河から信州を結ぶ三州街道は、中山道の裏街道として人馬の往来で賑わってきた。別名中馬街道とも呼ばれ、海産物や塩、茶などが伊那へ運ばれ、根羽村はその南玄関口の役割を果たした。いまは宿場町の面影はないが、豊かな自然の中を比較的スムーズに走行できるため、ライダーやドライバーに人気のツーリングコースになっている。矢作川の源流域に当たり、早くから下流域である三河圏との

長野県最南端に位置する根羽村は、^{やはらぎの}矢作川の源流域にあり、昔から下流域と連携しながら、水源涵養地として山林を保全してきた。山からの恩恵を次世代につなげようと、明治時代に村有林を村民のすべて450世帯に貸付けるという画期的な施策を行ったため、現在も全戸が平均5・5haの山を所有している。手入れされてきた根羽のスギは乾燥技術の確立で、品質の良さ、ピンク系の色合いと香りから「別嬪さん」と呼ばれて人気がある。移住してきて林業に従事する若者たちと植樹祭を中心に取材した。



▶ 国道沿いから見た根羽村(左)
矢作川の景勝地・根羽峡にかかる杉の橋(右)





▲高さ40m、幹回りが14mある月瀬の大杉
▶案内してくれた今村さん
▼スギで作られた根羽峡橋



外観は地味だが、中へ入って驚いた。木の香りと明るくて温かい雰囲気。満ち、特にデ
イホールは高い天井と自然光、柱はヒノキの丸太という贅沢さ。
お年寄りの入所施設は、介護状況や自律的生活が可能な人等にに応じて

林資源がとても魅力的でした。全戸が森林組合員だから、様々な事業に取り組みやすいと思いましたが。それに根羽は趣味のバイクでよく来ていたお気に入りの里山でした」と今村さん。
飯田市で農業をする女性と結婚、休日には田畑で働くのも楽しそうだ。
いまでこそ根羽スギ、根羽ヒノキはJAS認定を受け信州木材認証製品として高価格で取引されているが、かつては県外市場へ運ばれて三河杉という銘柄になっていたという働き者の山の民だ。まだ根羽スギという名称はなかったようだ。平成に入って、村では森林組合を強化し、林業の活性化へ向けて精力的に取り組んできた。

根羽スギの価値を生かして

根羽スギを象徴する巨木が「月瀬の大杉」。矢作川が蛇行しながら美しい溪流を作っている根羽峡の上であり、国の天然記念物に指定され、観光客が多く訪れることから、周辺を公園として整備している。

うな心地よい橋だ。橋を渡って矢作川を見渡せる小路を登っていくと、目の前に杉の大木が現れた。月瀬神社の御神木で、樹齢は180年以上というから、有史以来人々の暮らしを見守ってきたことになる。幹回り14m、高さ40mあり、いまだ枝を伸ばし元気な葉を広げている。

根羽のスギやヒノキは、県内外の木造施設に使われて人気がある。その一例として昨年開設した根羽村高齢者福祉施設「ねばねのさと・なごみ」を見学させてもらった。村の北玄関口には道の駅「ネバーランド」等のメイン施設で賑わっているが、「なごみ」はその反対側にある。環境に配慮して省エネルギーを取り入れた施設で、屋根には太陽光パネル、床暖房等には木質バイオマス利用の最新設備を導入している。

4つの棟で構成され、それぞれの棟入口は料亭か温泉宿に入っているような粋でお洒落な造りである。入所者はすべてが個室だが、棟ごとに共同ルーム、浴室、スタッフルームが機能的に配されている。現在40名が入所している。バイオマス燃料に使っている間伐材は、住民が山から「木の駅」に運び出したものを活用。これらの作業代は地域通貨で支払われ、村民の生きがい活動にもなっている。

水源地の森を下流域と共に育成

根羽村役場を訪ね、大久保憲一村長にインタビューさせていただいた。村長は森林組合

▶木の香と暖かさにあふれる高齢者福祉施設「なごみ」のデイホール(右)と部屋へ通じる廊下(左)





▲人口はちょうど良いと語る大久保憲一市長

長も兼務しており、全戸が森林組合員である根羽村では林業の振興が村の発展に繋がる。「矢作川は全長11.8kmあり、愛知県中央部を流れて26市町村を潤しています。その最上流部にあるのが根羽村で、明治時代より『上下流連携、流域はひとつの運命共同体』として交流してきました。明治13年に下流域に水路を通ず明治用水路が出来、大正3年には明治用水土地改良区が水源涵養林として山林427haを購入して保全しています。大正10年には国から約1300haが払い下げられ、村民一体でスギやヒノキを造林してきました。人工林率73%は、早くから手入れてきた品質の良い木材が多いということで、根羽のスギはピンク色が艶があり丈夫なことから、別嬪さんと呼ばれて、建材として高く評価されています。

根羽村は人口約1000人の小さな村ですが、私はこれでいい、行政的にもちよつといいと思っています。

交流人口が多く、I・Uターンしてきた若者も140名を超えています。山が好き、村が好きという人たちが安心して豊かに暮らせる村に、訪れる人たちが魅力を感じる里山にしたいと思います」と大久保村長は語った。翌土曜日は晴天の中、第64回「結婚記念植樹祭」が行われた。ネパランド広場には午前10時の開催に合わせて各地からバスや車が到着、新緑の芝生に座って開催を待った。舞台には毎年この日に祝福する新婚、銀婚、金婚式を迎える夫婦も一組ずつ参列した。根羽村からは小学生20名が参加。総勢約300名で、近くの山にツツジ400本を植樹する。大久保村長が挨拶したあと、参列した長野県東部に位置する川上村藤原忠彦村長が、「川上村も千曲川の源流にあります。標高が高いためスギの木は育たない。根羽村のご協力で川上では保育園、小学校の新校舎に根羽スギを使っています。快適な木造校舎だと人気で、二つの村は良い匂いでいつも繋がっています」と挨拶した。

植樹は道路に面した斜面の一角。村が公園として整備している場所で、昨年植樹したツツジが真紅やピンクの花を咲かせ、対岸にも数年前に植樹したツツジの群生が咲き誇っている。参加者は植樹には手慣れた様子であるが、斜面は広葉樹等が根を張っており、穴掘りに苦労して皆が汗だく。それでも作業は午前中に終了し、参加した女性たちは道端でワラビを採りながら、ウキウキと昼食会場へ向かった。村のお母さんたちが準備した五平餅やおやき、和菓子等が人気を呼んでいる。



高品質の木材を安定価格で

根羽村森林組合では、40年生以上のスギやヒノキを伐り出し、木の家の材料を生産加工・販売する、一次から三次までを一貫して行う「トータル林業」システムを確立している。

一次産業の最前線を担う森林整備部門では、森林施業プランナーを育成、8名の技能職員が伐採を集約的に行い、タワヤーダ、プロセッサ等の高性能機械と組み合わせた低コスト林業をめざしている。資料をみると、コンテナ苗による植栽、鳥獣対策を同時に行うなど、次世代に向けた森林づくりに取り組まれている。

二次産業である生産加工部門では、建材に必要な乾燥技術を確立「高温セット法」による乾燥方法で高品質の木材を安定的に供給している。また伐採した木や間伐材は、端材や

▶植樹祭に集まった流域の市民や根羽の小学生たち。斜面にツツジを400本植樹した

おがくずに至るまですべてを人工乾燥機の木質ボイラー燃料として活用している。

販売部門では、JAS認定を受けた根羽スギ、根羽ヒノキは信州を代表するブランド建築材として、南信・中信地区の需要が多いという。一般に、国産材を使った木の家は高価というイメージが強いが、根羽村森林組合では、建材を安く提供するために、工務店や建設会社へ直接販売するほか、根羽スギの柱材50本を無償提供したり、長野県の助成金を活用する等の提案を行い、木の家の普及に取り組んでいる。その結果長野県内だけで1500余件が建築された。

森林技能者は全員がイター

夕方5時過ぎ、森林作業を終えた職員たちが帰ってきた。今年入社した新人技能者3名と指導員、ベテラン職員の6名。現在森林技能職員は16名で、うち4名が女性だが、2人は山から直帰したということで会えなかった。今年4月に森林技能職員として入社した渡辺はるかさんは千葉市の園芸高校を今年卒業して、念願の森林作業員になりたいとやってきた18歳。動きも言葉使いもキビキビした魅力的な女の子だ。飯島郁雄さんは飯田市からサラリーマンを辞めて家族と共に移住、竹村



▲生木に水滴をかけて表面割れを防ぐ



▲乾燥した根羽スギの加工場



▲塗装や節のチェック等をする女子社員

亨さんは川崎市から移住してきた30歳。根羽村森林組合では、平成15年から始まった長野県の「緑の雇用」事業の第1期生である加藤雅晃さん(38歳、千葉から移住)を、続いて翌年には橋本真一さん(31歳、静岡県春野町から移住)を採用。二人は森林技能職員として働きながら、若手の指導にも当たっている。

翌朝は7時半に事務所集合、8時に出発して林家から委託を受けた森の間伐作業を行う。指導に当たるのは石原博樹さん。25年間山で働き、林業農家や新人技能職員の指導や安全管理に当たってきた部下たちの人気者。「根羽はイターン者に人気があります。山や植物などの自然が好きだからできる仕事だね。登山が好きで、ここで山仕事しながら足を鍛えるという人もいますし、バイクが趣味の青年もいる。一人前になったら、二人ずつで一つの山の間伐から下草刈り、植樹などの作業を任せる方式で、責任を持って当たるとい信用関係が出来ています」

作業服に着替え地下足袋を履き、道具類のチェックをしたあと、数台の車に分乗して山に向かった。集落から比較的近い堂の入川沿いにある山林で、樹齢100年程の巨大な杉が50本以上生えている現場である。数日前から伐採作業を行っており、何本かが伐られて横倒しになっている。100年の時を経た杉は樹高が30mもあり沢山の枝を広げている。他の樹を傷つけることなく切り倒す知恵に改めて感心する。このあと道路に待機している運搬用重機

まで運び上げるが、このような巨木は運搬が一苦労で、幾つかに造材して運搬することになる。

石原さんが、新人の3人に木に登る実技を示した。約5mの高さに杭を打って足場の付いたロープを張り、体に安全ベルトを巻いて、木に密着させながら一歩一歩登っていく。続いてベテランの橋本さんが身軽に登っていき枝打ちの作業をはじめた。

「山の仕事では打撲、捻挫は当たり前というほど危険が付きまとう。安全に作業するためのコツや実技を身に付けるように指導するのが我々の役目です」と石原さんは言う。

この山について加藤さんは「伐採のあと新たに植林するように検討してもらっています。親の代までは木を植えて手入れしてきましたが、孫たちは殆どが山へ入らない。植林すれば下草刈りや枝打ち等の管理が必要なので、それが面倒なようです」と思案顔だ。

先輩たちの作業を見ていた新人さんたちは、そのあと道路に停めた車からチェーンソーを下ろして手入れをはじめた。各自に支給された機器のメンテナンスが大切だ。燃料も満タン、これから切り倒したスギの造材作業をはじめめる。

文/浅井登美子 写真/満田美樹

●根羽村森林組合 ☎0265-49-2120
http://nebaforest.net

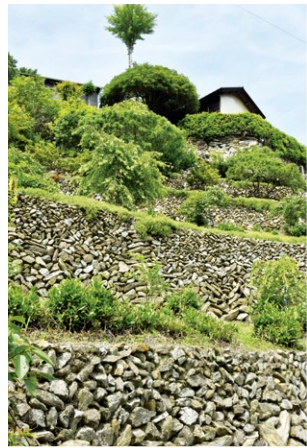
▶作業現場へ向かう新人職員と石原さん



▲朝7時半に組合に集合してその日の作業を話し合う。作業服に着替え地下足袋を履いて準備

▶石積み学校2日目。
新たな石積みに皆が結集して

吉野川中流に注ぐ川田川の上流域にある山里・美郷地区。広葉樹林の中を流れる清流は国の天然記念物に指定された蜚の生息地で、周辺の丘陵地や森の中には家々が点在し、日当たりのよい石垣の上に屋敷や梅園等がある。なかでも大神地区は代々築かれてきた石垣が天空に至る。



「高開の石積み」と呼ばれる里。5月21・22日の休日に真田純子さん（東京工業大学准教授）のプロデュース、石積み名工・高開文雄氏の指導による「石積み学校」が開催され、県内外から参加した15名が石垣の修復工事を行った。

下準備をして参加

早朝に東京を出て、徳島空港から車で吉野川市美郷地区に到着したのは午前10時半頃。新緑が美しい川田川沿いの国道193号を北上していくと、道路脇に「美郷ほたる祭り」「高開の石垣」と記されたのぼりが立っている。廃校になった中学校の校庭に車を停めて緩やかな道を登っていくと、大勢の人が石垣の

15名が参加してハードな実習 天空の里で、「石積み学校」

●徳島県吉野川市美郷地区

前に集い、作業を開始していた。

道路に面して高さ2mほどの石垣が左右約100m続き、上は柚子を栽培する畑。一部が膨らみ崩れる危険性があるため、人家に近く三叉路に面した部分の石垣を解体し、石を新たに組み直して修復する。高開さんが持参

◀「天空の里」地区と、芸術作品といえる石垣群。段々畑には梅、柚子が栽培されている



した10数種の専門的道具もそろっている。この実習の参加者は15名。参加費3000円を払って自ら2日間肉体労働をする覚悟で徳島県内外からやってきた人たちだ。東京から来た青年、京都から来た女性、遠くは台湾からやってきたカナダ人の青年もいる。半数以上が今回初めて参加したという。長靴や地下足袋を履き、厚手のゴム引き手袋をし、日差しを避けるために帽子を被るスタイルで、我々が到着した時はすでに汗だくになりながら、石を運び出していた。

中央で石垣を解体するための手順や方法を指導しているのが高開文雄師匠(83)。各地の石積みを手がけてきた石積み職工の第一人者で、シャンとした立ち姿、ジーンズのズボンがよく似合う若々しくて魅力的な方である。その元で、作業する人への配慮や説明に余念がなく、自らも石運びに精を出しているのが「石積み学校」を主催してきた真田純子先生(東京工業大学大学院准教授)。最初可愛い女子大生がいると思っただけだが、きややかな身体で機敏に動きまわり休む様子がない。徳島大学助教に就任して約10年間、徳島県や四国各地の景観保全活動に取り組んできた。今回の参加者にはすでに真田先生が編集した「棚田・段畑の石積み」という冊子が配布されており、石積み修復の基礎勉強をした上で参加しているようだ。

石垣にはコケや草花が寄生し、先人たちと暮らしを共にしてきた長い歳月が忍ばれる。多くの田畑ではあまり整形していない野面石を使用し、乱積みというランダムな方法や空石積みというモルタル等の接着剤を使わな

い方法で積み上げられてきたと、真田先生は著書で書いている。

「この方法の良いところは何度でも積み直しができるので環境に優しく地域の自然景観とマッチすること。排水性が高いため水分の多い地盤等にも強い。しかし石積みが出る技術者は高齢化し、いま80歳以下で修復を継承できる人は殆どいなくなりました。そのため崩壊した石積みはそのまま放置されるかコンクリートで固められています」

コンクリートは災害地でも見られるように、崩壊すると再生不可能で危険性のあるガレキになってしまふ。従来の石積みを再生する、そのための技術の継承が急務だと真田先生の活動が始まった。

さらに床掘り・根掘りして石たちに新たな命を

石積みは「一ぐり、二いし、三に積み」と言われ、一番大切なのがぐり石(外側の大き

な石の奥に積まれた小石)、一番目が石の質、三番目が積み手の技術だという。

石垣の解体作業は、石垣の上面からショウセン等の道具を入れてゆっくり崩していくことから始まった。外側には大きな石が組まれ、内側にぐり石がぎっしり埋め込まれており、これらを一つ一つ取り出して、道路脇に運んでいく。外見は小ぶりに見えた石が、取り出してみると奥行きがあり幅50cm以上、厚さ20〜30cm以上ほどあり、重さは40kgを超えている。最初はその重さに「うわー」と叫び声を発していた若者たちも、やがて慣れてきたのか姿勢を正してしつかり持ち上げ、黙々と指定の場所へ運んでいる。砂や砂利に混じったぐり石は分類しながら集めておく。

幅約10m、高さ2mほどある石垣は夕方までに解体されたが、さらに地面から20cmほど掘り下げ、溝をつくっていく(床掘り、根掘り)。



▲石垣近くの明石さんの家が休憩場で奥さんが冷たい飲み物を用意。手前左は、今年東京都の建設局に就職した田中信さん、右はカナダ人のグレイムさん。台湾から参加した▼解体した石垣。膨大な石が出て、それを分類しながら並べていく



しかし、これらの作業が終了間近と思われる頃、地面からとつともなく大きい岩塊が現れた。そのままにすると思っていたら、高開師匠はこれを取り除くように指示した。石垣の隣に住み休憩所も提供してくれた明石光弘さんと高知県から来た「園芸ナギ」経営の小川悠さんがゲンノウとショウセンという鉄棒を振り降ろして、約30分以上かけて岩塊を割り砕いていった。石目を熟知しているからできる作業のようだ。皆の飲食の世話を担ってくれた明石さんの奥さんも見に来て、心配顔。この作業を高開師匠は、「床掘りして溝をきちんと作り、一番下に大きな石（根石）」をしつかり置くことが石積み作業の基本だね」と涼しげに言い放ち、別のメンバーに指示して仕上がった床に根石を設置する作業をはじめた。特大な石が地面の奥に土台として並べられていく。

夕方5時過ぎ、その日の作業は終了。明日は朝9時からいよいよ石積みが始まる。

技術の継承を主体的・持続可能で

真田純子先生は広島県生まれ。東京工業大学大学院社会学研究科を卒業して平成19年1月に徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部助教に就任した。農村景観の研究で徳島県をはじめ四国各地を積極的に歩くうちに、山間地が多いこと、棚田や段畑、家屋敷は先祖代々築かれた石積みによって支えられていることを再認識した。棚田や段畑は中山間地の文化や資源であり、その風景が失われることは地域の活力も失われることになる。農村が活性化するためには、そこにある景観

的資源を積極的に保全・活用していく必要があるが、保全のルールを作っても技術が継承されなければ運用はできない。真田先生は、石積み技術を持つ人、習いたい人、直してほしい人の3者をマッチングする講座として、一般人を対象にした「石積み学校」の開催を考えた。開催情報はフェイスブックで発信、技術をまとめた冊子も制作した。

地元の新聞が記事にしたこともあって反響は大きく、各地から石垣を直してくれ、研修会を開いてくれという要望が寄せられた。そのため今までに徳島県内を中心に上勝町で4回、三好市で3回、吉野川市美郷地区で5回など、合計16回「石積み学校」を開催してきた。

真田先生は「石積みは全国各地にあるが、石の性質や形状が異なっても、構造に関わる基本的な技術は共通している。学校の開催は全国的規模で展開できる。積める人を増やしていきたい」と言う。

石積み工として独立を目指す青年も誕生した。当初から真田先生の下で学んできた金子玲大さんと、徳島県上勝町の地域おこし協力隊員として採用され、今年から同町で石積み学校を開催するという。

習いたい人が参加費を出すこのシステムについて先生に聞いてみると「補助金に頼った活動は、補助金がなくなると活動が終わってしまうことが多い。いただいた参加費で講師代と事務局の人員費は何とか捻出できます。持続可能性のある活動をしていくためには、いまの学校システムがいいと思っています」と明確に語った。

翌日も晴天、作業は9時前から開催され、

▼左から真田純子先生、明石光弘さん、指導に当たる高開文雄師匠



▲高知市の園芸家小川悠さんは家族で参加。真奈君は皆の人気者



▲鳴門市で養蜂店を営む石垣誠一さん



▲定年後は地域のためにと参加、阿南市の八百原孝さん
▶京都から参加した室内装飾家の吉賀郁子さん。10kgもある石を運ぶ

石たちはベテランの石工と参加者の手で美しく力強く積まれていく。外側に大きい積み石、その奥にぐり石を隙間なく並べるが、積み石

の置き方に技術の粋が結集される。

1mほど積んだところで石に鉄の棒をはさみ込んで、足場を作った。作業をスムーズにするための知恵が生きている。外石をきれいに並べるための目安に水糸や板が張られる等、作業は皆が役割を担いながら進められていく。

昼食の休憩時に高開師匠に「今日は何時まで作業ですか」と聞くと、例のがつしりした手を出して、開いた。つまり5時までという合図である。夕方東京等へ帰るために4時前に退所したい人もおり、一般に体験学習等は二日目には早く切り上げるものだが、高開師匠の開いた手からは、これは遊びの学校ではない、石積みを完成させることだという強い意志が感じられた。あとで真田先生に聞くと、石積みは夕方5時には完成、先生も最終飛行機で東京へ戻ったとのことだった。

人々の夢を組んだ「高開石積み」の里 美郷は豊かな自然郷

石積み学校を開催した美郷平地区から車で5分ほど登っていくと、手入れされた石垣が幾重にも続く大神地区へ出た。石垣は空まで届きそうで、その中に5、6軒の農家がある。駐車場に車を停めて石積みの中の階段を上っていくと、婦人二人が庭先でお喋りしている家があった。「どうぞ、どうぞ」と招かれて軒下のテーブルに座ると、眼下には見事なパノラマ風景が広がっていた。「冬もそれほど寒くなく、夏も快適、この風景を見ているだけで気分がいいですよ」そこは下の地区で石積みを目指すしている高開師匠の家だった。

対岸にはその日宿泊する予定の民宿「きの

この里」も見える。庭先に風除けの生垣を配し、庭には様々な植物が植えられてよく手入れされている。芸術的で希少性の高い大神地区の石積みは高開文雄師匠と仲間たちの歳月をかけた一大作品であると感じた。芝桜等を植えて景観保全にも取り組んでおり、12月末には石垣が2日間ライトアップされるとのこと。「にほんの里100選」にもなっているユートピア郷であった。

美郷は全域が蛍の発生地

新緑の川田川沿いは清流のせせらぎと鶯の声が溢れているが、この季節の夜の主役はゲンジ蛍。「美郷ほたる祭り」が間もなく始まる。その準備で多忙な武田彰仁館長を美郷ほたる館に訪ねた。国道沿いに建つモダンな建物で、地区の公民館的役割も担っており、石積み学校の開催時には事務連絡もしてくれる。

美郷地区は1970年に全国で唯一、全域が蛍の発生地として国の天然記念物に選定された。82%を占める豊かな森林の中、奥野々山を源にゆつくり蛇行しながら吉野川に注ぐ川田川は、山のミネラルと多様な植物や生物が生育する清流で、蛍の餌となるカワニナが豊富。特色は蛍が乱舞するポイントが下流域から上流まで8カ所あること。そのため、5月中旬から6月中旬まで1カ月間以上鑑賞でき、美郷ほたる祭りには全国から3万5千人がやってくるといふ。

ほたる館には優れた展示室がある。地下1階には京都嵯峨芸術大学チームが調整した「川田川中流域の暮らし今昔」という展示ルームがある。奥にはカワニナの観察室があり、

地下2階から外へ出ると、そこは森と川がとびきり美しい蛍鑑賞のメイン会場であった。「国の天然記念物指定地なので、カワニナ一匹でも人為的に扱うことができませんが、40年間経っても自然発生する蛍の数は殆ど変わっていません。地区住民あげて環境保全に力を入れていくからだと思えます」と武田館長は言う。

旧美郷村は最盛期には人口5、600人、子供も910人いたが、いま人口は約1、000人、小中学生は18人。丘陵地で農地が少ないため若者が定住できる地域産業が少ない。「でも2月には一面梅の里、3月には石積みの芝桜、3〜4月には桜、続いてツツジが咲き蛍が飛ぶ、どこにも負けない美しい自然郷です。最近は観光客が増えてきました」と館長は言う。

ほたる館が行う数々のイベントやほたる祭り、石積みの修復作業を支えているのが住民の有志でつくるNPO法人「美郷宝さがし探検隊」で、最近では里山の食文化を提供する農家民宿や、農業や石積み体験する行事が人気を呼んでいる。宿泊した「きのこの里」経営の川村里子さんもメンバーの一人で、その食事の美味しかったことにも触れておきたい。

文／浅井登美子
写真／小林恵



◀左/ほたる館の裏手を流れる川田川で武田館長。ほたるが舞う人気のスポットで、普段も憩いの場として人気
右/川田川の今昔を示す展示室

- 石積み学校
<http://www.g-mark.org/award/describe/41862>
- 美郷ほたる館 ☎0883-43-2888

■移住して伝統工芸職人に 地域おこし協力隊員が 地域伝統の技を学ぶ

▼さまざまな素材で編み上げた籠、バッグ、ざる等(三島町生活工芸館)



人口減少や高齢化などが進む地方で、地域活性化の取り組みとして注目を集めているのが、「地域おこし協力隊」だ。福島県では昨年より地域おこし協力隊員を地域の伝統産業技術研修者として採用し、後継者として育成する制度を始めた。三つの地域を訪れ、そこで活動する地域おこし協力隊と受け入れる地元の様子取材した。奥会津の三島町、喜多方市雄国、山都町の事例を紹介する。

伝統を未来に受け継ぐために町では、昭和50年代から「生活工芸運動」を展開し、昭和61年には体験型のものづくり拠点「三島町生活工芸館」を設立。平成15年には、三島町を中心に生み出される生活工芸品が「奥会津編み組細工」として国の伝統的工芸品に指定されている。

しかし、作り手の高齢化が進んだことで、技術の伝承、後継者の育成がより一層求められるようになった。そこでクローズアップされたのが「地域おこし協力隊」の存在である。

若い力が受け継ぐ匠の技 「奥会津編み組細工」

福島県三島町
みしまち

雪深い風土が生む
素朴な生活道具

福島県の西部、尾瀬に源を発する只見川沿いにある山間の町・三島町。奥会津の一角にある緑豊かなこの町は、冬ともなれば積雪が2mを超えることもある豪雪地帯である。

雪におおわれる長い冬の手仕事も、古くからさまざまな民具を生み出してきた。ヤマブドウ、マタタビ、ヒロロ（ミヤマカンスゲ、オクノカンスゲ）といった植物を秋までに近くの野山で採取。それらを材料にした各種の生活道具作りは、昔は三島町のどの家のいりり端でも冬場に見られた風景だった。

地域おこし協力隊は、おおむね1年以上3年以下の期間、地方自治体の委嘱を受け、その地域で生活し各種の地域協力活動を行うという制度。平成21年度から総務省主導によってスタートして以来、年々隊員数は増え続け、今年度中に全国で3000人に達すると見込まれている。隊員は活動終了後も地域に定住・定着することが推奨され、実際、任期終了後、隊員の約6割が同じ地域に定住を果たしている。

三島町では、平成25年度より地域おこし協力隊を募集。以来、集落支援、農業、情報発信、商工会、観光PR、外国人観光客誘致などの分野に隊員を迎え入れてきた。

伝統工芸士が認める後継者に

現在、町内の三島町生活工芸館を拠点に、編み組細工の技術習得に励む清水夏穂さんも、



▲モノづくりの拠点、生活工芸館外観。周辺は貴重な植物が生える緑地になっている
▼技術研修をする清水さん(左)と指導員の目黒さん





▲作業に励む清水さん。右は工芸に利用されるアカソとアオソ

「3年間、技術をしっかりと学んで、ゆくゆくはこの町で工芸作家として一本立ちできれば。でも、まだまだそのレベルは遠くて…」と清水さん。ざるなどを編んでも、師匠がやったところ

その一人だ。神奈川県小田原市に生まれ、芸術系の大学で木工を専攻。在学中は家具作りを専門に学んできた。卒業後、喜多方市のNPO法人を経て、三島町の木工指導員に採用されてこの町へ。さらに、編み組細工の技術習得を目的とした地域おこし協力隊に応募して採用となり、平成28年1月より編み組細工を学ぶ日々を送るようになった。
「大学で専らやっていた家具作りも、今、一生懸命勉強している編み組細工も、どちらもモノづくりとしては同じです。でも、機械を使わず身一つでモノづくりをしている感覚が、編み組細工の面白さですね」と清水さんは語る。
清水さんは、現在、ヤマブドウ、マタタビ、ヒロロの3種の編み組細工について、それぞれの分野でこの町を代表する「師匠」に手ほどきを受けている。今は、協力隊としての報酬をもらいながら技術を学んでいる身であり、任期が終わる3年後が本場の意味でのスタートだと思っという。

ろと自分がやったところでは、網目の美しさ、細かさに差が出てしまうという。それでも、木工をかつて勉強していたこともあって、飲み込みは早い。
マタタビ細工を清水さんに指導する同町の伝統工芸士・目黒政榮さんも、「短期間のうちにここまで編めるようになる人は、なかなかいない」と目を細める。

編んだ目が粗くなったりムラになったりしないように、また曲線がなだらかなるようになるのが、マタタビ細工の一番難しいところ。目黒さんのような熟練者によって編まれた品は、軽く使いやすく、型崩れすることなく長持ちするが、そのレベルまでは一朝一夕で達することはできない。
「網目が緩くなったりほつれたりしたら修理も簡単にできるのが、編み組細工のいいところ。湿気さえ気を付ければ、一生ものの道具なんですよ」と目黒さん。

素晴らしい編み組細工の技術が、地域おこし協力隊によって受け継がれていくことに、目黒さんは今とても感謝しているという。

若者の感覚が創る新たな「桐製品」

今回、取材で訪れた「三島町生活工芸館」に隣接して、「会津桐タンス株式会社」がある。地域おこし協力隊とはまた別な形で、桐製品の世界にも「若い力」が生かされていると聞き、同社を訪れてみた。

桐製品作りが盛んな会津にあつて三島町も有名産地の一つで、これまで箆笥を中心に優れた桐製品を生み出してきた。しかし、和箆笥の需要が減ったことで、新たな製品開発の



必要性が生じるようになってきている。

会津桐タンス株式会社でも、桐製の米びつ、チェスト、裁縫箱、多目的ボックス、漆塗りシリーズなどを開発し好評を得ている。

平成18年から21年の4年間には、同社と多摩美術大学生産デザイン学科、三島町が産学官のコラボレーションを実施。桐材の新たな可能性を探るこの取り組みからは、桐を使った傘、枕、ギフトボックス、椅子など造形美豊かな作品の数々が生まれた。一見、それとわからないモダンなデザインの茶筒は、グッドデザイン賞も受賞している。

お話をうかがった会津桐タンス株式会社の板橋充是さんは「学生の発想の素晴らしさには驚かされました。桐箆笥を作ってきた者には絶対に思いつきませんよ」と、コラボレーションがもたらした結果を高く評価する。今後、若い感性やアイデアを積極的に取り入れた製品の開発により、会津桐の新しい魅力を三島町から発信していきたいとのことだった。

●三島町生活工芸館 ☎0241-48-5502
●会津桐タンス株式会社 ☎0241-52-3823

▶上/会津桐タンス株が制作する人気の桐製品
下/若い人のアイデアを生かして材を加工していく



時代に合った新たな創作に期待 「雄国根曲竹の竹細工」

福島県喜多方市熊倉町



▲根曲り竹で編んだ伝統的な製品の数々 ▼最後の仕上げ作業
▼しっかり編み込む大切な最初の作業 ナタで竹を整えて飾り風に編み込む



喜多方市の南東の端、なだらかな斜面に清々しい田園風景が広がる熊倉町雄国地区。ここでは古くから山野に自生する根曲竹を使った竹細工の生産が盛んだ。この伝統の「雄国根曲竹の竹細工」の世界でも、いま地域おこし協力隊の挑戦が始まっている。籠、ざるといった昔ながらの民具だけでなく、現代の生活により合った竹製品のニーズも増えており、隊員の活躍に期待が寄せられている。

今年、雄国の根曲竹細工の技術を習得する地域おこし協力隊員2名の採用が決まった。

今回の取材は、同町への赴任前ということで隊員に会うことは叶わなかったが、隊員の指導に当たると「雄国竹細工保存会」(以下、保存会)の方々にお話をうかがうことができた。保存会のメンバーは、いずれも農業のかたわら竹細工作りに长年携わってきた大ベテランである。

保存会の活動の拠点は、旧熊倉小学校雄国分校である「おぐに交流の郷」。かつて教室だった作業部屋では、定期的に竹細工の体験教室が開かれており、誰でも保存会の手ほどきの下に作業を楽しむことができる。体験教室では、このおぐに交流の郷が、やはり技術継承の拠点となっている「雄国そば」が味わえることも売りものになっている。

作業部屋の壁には、根曲竹細工の作品がずらりと飾られている。地域おこし協力隊の隊員も、週に4日、この部屋で保存会の会員から竹細工の指導を受けている。

「昔は、作れば売れるので、各家で競争のようにして作っていました。忙しいときは、11時前に寝ることなんてなかったですよ」

保存会の三星智善さんは、往時を懐かしんで、そんなふう語る。かつては農家の副業として盛んに竹細工が作られ、会津若松などから来る仲買い人に買い取ってもらったことで貴重な現金収入を得ていた。

材料となる根曲竹は、秋、地域の東側にそびえる雄国山に入って採取される。大事な生活の糧であるため、かつては採取の期間や手法が厳密に定められており、集落全体で固く守られた。根曲竹のタケノコは食用となるが、それさえ採って食べるものが禁じられていたという。

雄国の根曲竹は、粘りがあり、専用のナタ一丁を巧みに使って編まれた各種のざるや籠は、軽く丈夫で、使い込むほどに色や光沢が増して美しくなる。近年では、伝統的な品々だけでなく、ランプシェードや玩具なども開発され、また竹を着色することでカラフルな製品も生まれている。

「伝統の技術を生かして新たな需要をどれだけつくっていくか。また、後継者をどう育成していくかが、今の大きな課題」と三星さん。切実な思いがあるだけに、地域おこし協力隊の活動には期待を寄せている。

「協力隊のお二人には、私たちにない発想で新しい工夫をして、雄国の根曲竹細工の新たな需要をつくり出してほしいですね」

▶集まってくれた保存会の方々
▼根曲竹は食用にせず厳重に管理して来た、三星さん



- 雄国竹細工保存会(武藤様宅)
☎0241-25-7722
- 特定非営利活動法人
喜多方市グリーン・ツーリズム
サポートセンター
(体験教室等の問い合わせ)
☎0241-24-4488



▲そば粉100%の山都そば

阿賀川に只見川が合流するあたりが山都町。一帯はそばどころとして知られ、町内には20軒ほどのそば店があり味を競い合っている。この町にも、地域おこし協力隊の隊員が移り住み、現在そば打ち修業に励んでいる。

昭和50年代に山都町商工会が「むらおこし事業」に取り組んだ折、町内の宮古地区に伝わり幻のそばとも呼ばれた「宮古そば」に注目。新たに「山都そば」として売り出したのが山都のそばの始まりだ。宮古地区はそばの生育に適した標高400m前後にあり、一日の寒暖差が大きいことで、古くからそばが盛んに栽培され地域の人の常食となってきた。もともと家用にそばを打っていた農家が多く、古くは行商人を、昭和30年代ごろからは県道工事などの関係者らをそばでもてなしていたが、むらおこし事業のころから営業店の体裁をとっていった。

山都そばには、約束事が決められている。まず「製粉歩留まりが70%以内」であること。つまり、製粉されたそば粉を玄そばの重さの

3名の隊員が蕎麦打ち修業中

「山都そば」

福島県喜多方市山都町

70%の範囲内に留めているため、甘皮などが少なく他の地域より白っぽい色のそばが出来上がる。さらに「つなぎを使わないそば粉100%の手打ちそばであること」、「挽きたて・打ちたて・茹でたての3つたて」であることも条件となっている。

「こうした原則に加え、上質の一番粉を中心に使うので、シコシコとした歯ごたえとほんのりとした甘みも感じられる上質のそばが出来上がるんです」と、会津山都そば協会の会長であり、そばの栽培農家を営む鈴木勝さんは誇らしげに語ってくれた。

山都町では、町内の「そば資料館」や「そば伝承館」などを拠点に山都そばの普及・伝承に努めるほか、各地の名産品イベントに出店して積極的にPRを行っている。

昨年、そばの文化や技術の継承をさらに推進するために、地域おこし協力隊を募集。20代から50代までの隊員3名が採用され、山都町でそばの修業に励むこととなった。

隊員の一人、須賀川市出身の岩瀬雄太さんは、将来自分の店を持つのが夢。千葉の大学を卒業後、一度は自動車販売会社に入社したが、夢を諦めきれず退社。その後、たまたま山都町に立ち寄ったことが、地域おこし協力隊での活動につながった。

「会津山都そば協会会員の方の指導を受けて、製粉技術や打ち方などの基礎を学んでいます。

今は大変ですが、将来に向けて技術をしっかりと身につけたいですね」と岩瀬さん。

伝統の技を習得し味わう人を満足させるためには、3年という協力隊の活動期間だけでは十分とは言えないかもしれない。しかし、その期間にこだわらず、岩瀬さんをはじめ協力隊のメンバーは、そばの技を磨きその奥深い味わいの世界を追求していくことだろう。

去る6月16〜19日東京代々木公園で、全国の著名なそば処15地区が一堂に会して「大江戸そば博」が開催され、山都町もベテラン職人が総勢で参加、「つなぎなしの十割そば」を提供した。その場で捏ねて手打ちして、サツと冷やしたそばは大変人気で長蛇の列が絶えなかった。

客のガイドや整理には、地域おこし協力隊の隊員たちが当たった。

文/加藤伸一 写真/小林恵



▲山都そばの振興に努める会津山都そば協会会長の鈴木勝さん
▲東京代々木公園で開催した「大江戸そば博」で働く岩瀬隊員



- 喜多方市ふるさと振興株式会社 山都事業所 ☎0241-38-3000
- 会津山都蕎麦「蕎麦(きょうむら)」(取材協力) ☎0241-38-3344



▲鍛冶屋の建物と設備を受け継ぎ、野鍛冶に精を出す秋田さん
(写真/Jun Ishikura)

多種多様な道具を作れること

私は5年ほど前に安芸太田町で二世代続いた野鍛冶の作業場を引き継ぎ、いろいろな道具を直したり作ったりしている。初代創業者は、同町の鍛冶で修業して独立、その二人の息子（河野さん）も鍛冶屋を引き継いできたが、高齢化し、その次の世代は後継しないため、廃業することになった。鍛冶屋の建物・生産設備は町に寄贈されて、町では管理者を募集したいと思っていて私は、それに応募し採用された。

■移住して伝統工芸職人に 鉄に魅せられて鍛冶職人に

鍛冶工房「金床」秋田和良

●広島県安芸太田町

寄稿

大学時代から鉄製品に魅せられてきた秋田和良さんは、移住して廃業した鍛冶屋を受け継ぎ、地域の人から依頼を受けた農林用の道具の直し等の野鍛冶を手がけてきた。しかし刃物を作る焼き入れ等の過程で納得いかない部分が生じ、現在は特殊道具の注文を控えている。鋼の廃棄が増え、受注する鍛冶用具が減少しては鍛冶職人として食べていけない。腕を上げて使い勝手
のよい道具を提供すると共に、自分がめざしてきた鉄製品も制作したいと秋田さんの試行錯誤が続く。今回は秋田さんご自身に執筆していただいた。

大学、大学院と鉄を素材にしたオブジェを作る傍ら、日本の鉄文化の担い手である鍛冶屋、特に野鍛冶に興味を持っていたので、つい最近まで仕事をしていた野鍛冶の作業場で、地域の需要に応じて道具作りを身をもって体験できるチャンスに出会えて、非常に嬉しかった。
野鍛冶の仕事は、包丁専門やノミ専門の鍛冶屋とは違って、個々の道具の需要に応えることにある。取り扱う道具は、農具を中心に多種多様、常に何かしらの仕事量があるという
ことで、農機具の制作や修理などの具体的

な手順については、鍛冶屋を営んで40年のキャリアを持つ河野さんに1年間手本を見せてもらいながら、徐々に身に付けて行っただ。

大学院生の間までに鉄を叩いたことがあり、また道具作りに必要な鍛接も不完全ながら習得していたので、形を作ることは苦ではなかった。しかし鋼を用途に応じて硬さや靱性を与えるための焼き入れや焼き戻しといった熱処理は殆ど経験がなく、河野忠行さんのやり方を真似て、初めて覚えていった。

今の私の仕事内容は、多い順から板鍛、四つ鍛などの各種鍛の修理や注文制作、里山や家庭で使われる刃物類の修理・制作、石工や山師が使う専門道具、地域伝統芸能の神楽で使う小道具や鉄の金具や小物などインテリア関係の仕事。

守備範囲は広いと思うが、どれも超一級の品質でこなせるわけではない。鍛類はやや得意だが、鉋は数をこなしていないため時間がかかる。お客さんに詳しい使い方や要望を聞いて形にし、新たに商品が出来上がるというケースを繰り返してきたともいえる。

各種の仕事を受ける上で大切に行っていることがある。お客さん個人がその注文の道具のどのような価値と性能を求めているかしっかりと聞き取ることだ。安さだけを求めていたり他で探した方がいい場合は断ることがある。私の工場の鍛造仕事は、個



◀秋田和良さん。広島県生まれ。2010年富山大学芸術文化学部卒業、2012年広島市立大学大学院博士前期課程(修士過程)を修了。安芸太田町へ移住(写真/Jun Ishikura)



▲修理に持ち込まれた鋏
▶先端に新たに鋼を加えて作り直した鋏



▲農耕用に使う鋏、修理前
▶使い手の要望に合わせて作り直した鋏

際に欠陥が見つかった場合には、作っていた時間はただ燃料の松炭を無駄に燃やし、疲れを溜めただけという気持ちに心が委縮していく。一からの作り直しでは収入にならないため、生活の不安から心身のバランスが崩れるときもあった。

鍛冶仕事で暮らし始めて5年経って思うのは、自ら身に付けた技術とアイデアを駆使して、買われ使われる商品を作れる技術者は凄いなということ。美術品でも工芸品でも同様だが、仕事をすれば技術力が上がり収入も増えないといけない。鉄が好きで、それを叩く仕事をしたかった私だが、野鍛冶の仕事はまだ未熟で、遅くて失敗もあり、技術料を安く見積もる悪い癖もある。この調子では未来は明るいとは言えない。

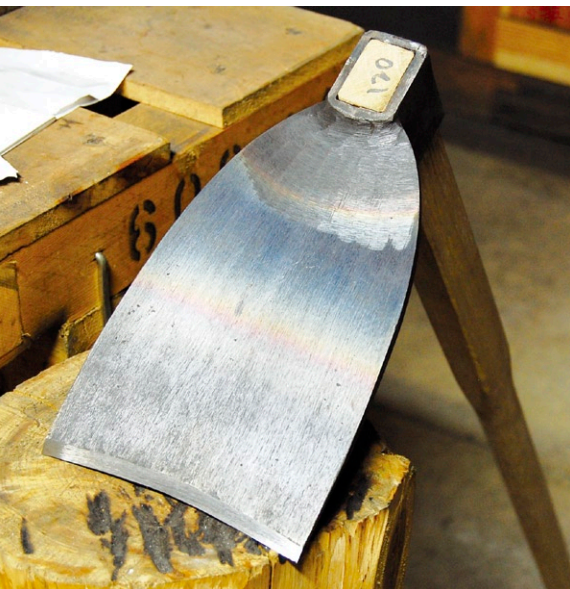
さらに、今農機具の修理を依頼してくる多くのお客さんは高齢である。農作業の機械化も著しい中、鍛冶屋で道具を誂える人は今後さらに減少していくだろう。せつかく技術を身に付けて後継しても、活用されず生活し

安定して仕事や生活ができるように

別の注文に応じて一つ一つ材料を松の炭で加熱しては叩いて形成していくので、時間がかかり、量産された市販品に比べるとやや高い価格になる。それを承知してもらい、使い手が満足し長く使ってもらうことが鍛冶屋の使命だと思っている。

しかし、野鍛冶の特徴である、お客さんの個別の要望に対応するということは、結構難しいことでもある。納品の際に修正が必要な場合があり、道具の種類や形に応じて熱処理をするため、一からやり直しになる。完成間

▼上/鉄製の皿やインテリア等、秋田さんのオリジナル製品 下/注文で制作した唐鋏



ていなければ途切れていく。事実私のいる加計地区でも5軒あった鍛冶屋のすべてが後継者がおらず、1軒だけ物好きな私が来たため継続している。しかし今までのやり方では継続していくには不十分だ。

今の私は、ふんばって野鍛冶の技術を高めていく一方で、現代社会に提案可能な鉄商品作りに柔軟にシフトしていきたいと思っている。自分の目を通して見つけた興味ある物事を鉄でどう表現していけるか。それは従来の野鍛冶が作ってきた物に縛られ過ぎず、あくまで自分なりの野鍛冶を見つけていくことにもなる。自由に楽しく鉄を叩き続けていきたいと開き直っているところである。

「編集部から」後継者不足は各地の鍛冶屋も似た状況にあり、そのため地域おこし協力隊員として採用して鍛冶職人を養成する市町もいくつか出てきた。高知県四万十市が2名の地域おこし協力隊員を採用、新潟県長岡市でも今年4月に鍛冶研修生を募集している。



合掌造り民家の集落で名高い五箇山。この地の伝統産業「五箇山和紙」が今、国内外から熱い視線を浴びている。古くから伝わる手漉き和紙のよさを生かしながら、若い世代の人たちが魅力を感じるような、新しい感覚の商品を次々と企画・開発しているのだ。低迷する日本の和紙産業を元気にするヒントはあるのか。深緑の山々に抱かれた「五箇山和紙の里」を訪ねた。

五箇山の「五」と職人の手の「五」本指

前日の雨をうけて、木々の緑が生き返ったように元気だ。和紙の原料となる楮こうぞの畑で、腰の高さまで伸びた幹を点検するのは、五箇山和紙の里の職員、石本泉さん（33歳）。手漉

■移住して伝統工芸職人に 新感覚の五箇山和紙を世界に発信 「FIVE」& 伝統の復元

き和紙を使った新感覚の商品「FIVE」の生みの親ともいえる若者だ。

石本さんが、東京からこの地に移り住んだのは8年前。武蔵野美術大学で木工を学んでいた頃、五箇山和紙と出会い、自然豊かな五箇山の土地柄と手漉き和紙に魅せられてITイン移住を決意した。

「最初の3年間は仕事を覚えるだけで精一杯でした。ところが、2011年に東日本大震災が起き、観光客がパツタリ途絶えたんです」紙漉き体験の予約キャンセルも相次ぎ、職員たちは暇で、することがない状態だった。なんとかしなければと思った石本さんは、同

僚に声をかけ、大学時代の同級生のデザイナー（東京）に協力してもらって手漉き和紙を使った商品開発のプロジェクトを立ち上げた。「これまで和紙に関心のなかった若い世代の人たちにその魅力を伝えたい」。そんな思いを込めて生み出したのが和紙ブランド「FIVE」です。

五箇山の「五」と「山々」、「職人の手の五本指」をイメージしたというロゴマーク。そこには、五箇山を愛し、職人の手仕事に敬意を表する思いがうかがえる。

FIVEは、既存の和紙のイメージにとらわれない、シンプルなデザインとビビットな



▲世界遺産に登録されている「相倉合掌造り集落」



▲五箇山和紙は楮の栽培から紙漉きまで一貫して作られている





色彩が特徴だが、五箇山和紙の伝統も生かされている。ブックカバーやカードケースに使用した和紙は、楮の栽培から手漉きまで一貫して手掛けたもの。コンニャク糊を和紙に塗り込むことで、柔らかな風合いを保ちながら強靭さを兼ね備えるものになった。

FIVEはフランスのメゾン・エ・オブジエなど海外の見本市に出展し、高い評価を得た。また、FIVEのカードケースは、平成



▲左/昔ながらの技法で染色した「雪花」中/モダンな市松模様の「ちんちろ」は若い人に人気 右/国内外の展示会で高い評価を得た「FIVE」
 ▲左/柔らかな光が魅力的な和紙の灯り 右/花を生けても素敵な和紙のバッグ

27年に経済産業省の「ふるさと名物発掘連携促進事業」に認定、カード・ケースとブックカバーは「富山プロダクツ」に選定された。全国の東急ハンズで若者向けのワークショップを開いたり、展示会に積極的に出品するなど販路開拓も精力的だ。

石本さんたちはまた、埋もれていた昔の商品をリプロダクトして、「雪花」「ちんちろ」というブランドを立ち上げ、シリーズ化。さらに、和紙と他の素材とを組み合わせて商品を作ることや、海外展開も考えているという。

素材づくりから、 素材を生かした商品づくりへ

五箇山でいつごろから紙漉きが行われていたのか定かではないが、平安時代の延喜式に、越中国（現在の富山県）が朝廷に和紙を納めたことが記されている。また、江戸時代初期の文献には、加賀藩二代藩主・前田利長に「中折紙」が献上されたという記述が残っている。

五箇山和紙は、繊維の長い楮を原料としているため「洗濯がきく」といわれるほど丈夫だ。そのため、障子紙、傘紙、提灯紙など、昔の暮らしになくてはならないものだった。

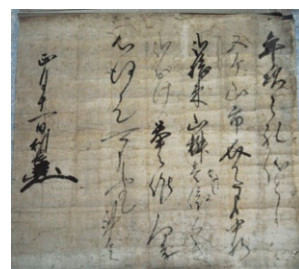
しかし、洋紙の普及とライフスタイルの変化にともなって和紙の需要は減っていき、昭和30年頃まで五箇山に1000軒あったとされる和紙農家も、今では3事業所のみとなった。そんな五箇山和紙の変遷をつぶさに目にしてきたのが和紙の里の館長で、伝統工芸士の東秀幸さん（59）だ。

「小学校に上がる頃まで、合掌造りの家で祖父が紙漉きと養蚕をする姿を見ていましたが、家屋の建て替えを機に紙漉きをやめてしまった。昭和30年〜40年代の高度経済成長期にはそういう農家が多かったですね」

東さんは昭和58年、五箇山和紙の里のオーブンと同時に紙漉きの仕事に就いた。そのころすでに、伝統工芸である和紙産業の衰退に危機感を覚えていたという。

「ところが、昭和56年に国道156号線が、昭和59年に304号線のトンネルが開通したことによって、かつて「陸の孤島」といわれた五箇山にどんどん観光客が入って来るようになったんです」

▼手漉き作業をする東秀幸さん



▲前田利長に中折紙20束を贈ったことが記された「瑞願寺文書」



▲明治期の紙漉き道具も残る

▶石本さんとともに新ブランドを立ち上げた企画デザインのスタッフ



平成7年に、相倉合掌造り集落と菅沼合掌造り集落がユネスコの世界遺産に登録されたこともプラス要因となった。

東日本大震災の影響で業績が落ち込んだ時期もあったが、和紙の里は、順調に売り上げを伸ばしている。商品のラインナップが充実し、観光客も増加。昨年1年間に紙漉き体験をした人は1万人にもものぼるといふ。全国の和紙産業が低迷する中で、ここ和紙の里が元氣な要因は？と尋ねたら、

「上質の素材があっても、素材のままでは食べにくい。それを料理して、食せるものにしてくれる人が来た、ということですね。石本くんら、美術系の人の力は大きいです」と東さん。では、伝統産業を継承するためにこれからすべきことは？の質問には、

「自分でできることは、基本を伝えること。楮を育て、加工して、作ることを若い人に教えていきたい。ただ、地元で和紙作りにかかわる人が少ないのが課題です。和紙まつりや小学生を対象とした紙漉き体験などを開催していますが、これからも土地の人が和紙に触

れる機会を積極的につくっていききたいと思っています」

紙漉き体験の45%が外国人

和紙の里の敷地の奥に、茅葺の大屋根が印象的な合掌造り民家が建っている。観光客が気軽に紙漉きできる「和紙体験館」だ。

取材に訪れた日、ちょうどアメリカからやってきた観光客の団が手漉き体験をしていた。職員の生田育子さん(46)によると、

「ここに勤めて20年になりますが、一番大きな変化は海外からのお客さまが増えたことです。手漉き体験者の45%が外国人観光客なんです。和紙のすばらしさは、日本人よりもむしろ、外国人のほうが理解しているかもしれません」

お客に紙漉きの手順を英語で説明しているのは、この冬から職員になったブルースター・コーディリアさん(24)。アメリカ出身の彼女は、東京の多摩美術大学で日本画を専攻していた頃、和紙作りに関心を持った。

「おとしの12月に紙漉き体験をするため、初めて五箇山を訪れました。ここは自然がきれいで、季節を感じやすく、生活もしやすい。今は型のデザインや通訳を担当していますが、仕事はとても面白いです」

この工房では、生田さんとコーディリアさん、そして、8年前に夫の転職に伴って東京から五箇山にイターン移住した土屋宣子さん(54)の3人が、商品の制作にあたっている。FIVEの企画・開発プロジェクトに関わった感想を尋ねたら、

「これまでとは違う新しい商品を作りたいと



いう思いは、以前から持っていたのでやりがいを感じました。若い人に和紙を使ってもらうためには、若い人が使いたくなるようなデザインの商品を作らなければなりません。商品開発や売り出し方法が重要だと感じました。石本さんたち若い人のアイデアは新鮮です」と生田さんと土屋さんは話す。

独自の感性と技術、そしてネットワークを武器に、和紙の新たな可能性を広げている石本さんだが、何よりも、手漉き和紙の伝統を大切に、五箇山という地域を愛しているからこそ、職場の仲間たちに支持されているのだろう。

「五箇山和紙の魅力を世界へ発信していきたい」という彼らの情熱と行動力は、日本の和紙業界を大きく変えていくかもしれない。

文・写真／小田礼子

●五箇山和紙の里 ☎0763-66-2223

▶右上/山々に抱かれて建つ「五箇山和紙の里」
右下/合掌造り民家を活用した和紙体験館
左/和紙体験でハガキを制作するアメリカ人観光客

「人を増やしたい」思いを行動とカタチに

【大野地区公民館】

鹿兒島県垂水市 たるみずし

垂水市の中山間地に位置する大野地区は、市内9地区のモデル地区として、住民が検討を重ねて、平成22年に地域振興計画「大野づくり計画」を作成した。

この計画の中で、住民の一番の願いは「私たちは大野の人を増やしたい（住む人・来る人）だった。その目標に向かって住民自らが行動し、地区が抱える人口減少の課題に立ち向かっている。

大野地区は、大正3年に発生した桜島噴火の被害者が入植した開拓地で、現在約80世帯が暮らしている。平成に入ったころから少子高齢化が徐々に顕著になり、平成18年には大野小・中学校が閉校になるなど、人口減少の影響は現実となった。

垂水市では第4次総合計画に「市民と協働のまちづくり」を掲げ、地区公民館単位での



「大野いいきき祭り」会場風景。つらさげ芋を中心に大野地区の特産品が販売され大賑わい

地域振興計画の策定を目指した。

大野地区は旧来から住民活動が活発だったことからモデル地区として計画の策定を打診された。その結果、「自分たちが暮らす地区をどうしたいか」について住民が話し合いを重ね、2年7カ月かけて地区住民の想いを込めた「大野づくり計画」が策定された。

計画の目標期間は10年間。「私たちは大野の人を増やしたい」という地区住民の一番の願いをどのように取り組んでいくか。

平成22年から開始したのが「大野原いいき祭り」。特産品のつらさげ芋や地域の農産物加工品を販売する年一度の物産市で、以降毎年1500人以上が訪れる。

来場者には豚汁をサービス、昨年からはブルーリ活用したニジマス釣り会も開催。魚介類もサービス販売され、会場となる元小中学校は大賑わいする。

「つらさげ芋」とは、サツマイモを一カ月以上寒風にさらして甘くした大野地区伝統の保存食で、地区では「からいも生産組合」を立ち上げて共同管理すると共に、生産体制の



▲寒風にさらした甘くて美味しいつらさげ芋



▲住民たちの手で空き家を改修、リフォーム



▲大羽重神社に奉納される棒踊り。若者の闊達な舞いが特色

拡大、貯蔵施設の整備を行い、ブランド化をめざしている。お母さんたちの加工グループ「高峠わかば」ではつらさげ芋を使ったチップス、菓子、芋プリン等を製造して、道の駅たるみず等で販売するようになった。

また、市のまちづくり交付金を活用して、空き家をリフォームして大野地区への定住を促進する活動では、3軒をリフォームした。空き家への入居を含めて平成24、27年度までに大野へ移住してきた若者は5名になった。

閉校となった小中学校は、垂水市と鹿兒島大学が連携する「自然学校」の施設に運用され、児童生徒・大学生、市民の環境教育、体験学習の場に活用されている。

大野原棒踊り保存会の主催で、毎年秋に大羽重神社で行われる豊年祭には、鹿兒島大学の学生も参加して伝統芸能棒踊りを披露するなど、多くの来訪者で賑わうようになっていく。

- 大野地区公民館 ☎0994-32-4792
 - 大野地区公民館別館 ☎0994-32-0156
- <http://www.unobai.com>

里山の恵みを五名愛と地区活性化に

【五名活性化協議会】

香川県東かがわ市

五名地区は、東かがわ市の東部、徳山県境に位置する中山間地で、昭和の合併以前からお隣所で助け合う互助風土が残っている地区。現在146世帯312人が暮らしている（平成26年度）が、平成17年に五名小学校が廃校したことから、住民の地区存続に関する危機意識が高まり、地区を活性化するための活動が積極的に進められてきた。

その活動を担っているのが女性たち。平成13年に高松市の商店街で開催された展示会で、五名地区の特産品が高く評価されたことをきっかけに、女性たちが旧郵便局舎を利用して「ふるさとの家」を開設、毎週土曜日には地元産の食材で作った惣菜や弁当等を販売、住民の交流の場として賑わっている。最近では猪肉のカレーうどんとキョーザが人気だとか。

一方、五名小学校の廃校によって住民の危



▲地区の合唱団とプロの演奏会のコラボ、[やまびこコンサート]

機感が高まったことから、連合自治会、ふるさとの家、老人会、山村クラブ、女性部が一堂に会して五名活性化協議会を設立、住民一体になって、数々の活動を行ってきた。

中でも五名三天祭りと呼ばれるのが、旧盆に里帰りした人も参加交流する盛大な夏祭り「五名ふるさと祭り」、廃校となった小学校の文化祭を引き継ぎ合唱コンサートとして開催する「やまびこコンサート」、ふるさとの家のイベントとしてイノシシの丸焼き等がふるまわれる「いのしし祭り」。

五名の里山は移住して陶芸や木工をする人たちにも好評で、これらの作家たちが制作した五名地区観光マップが人気で、訪れる人が増えている。「五名に行こう」「五名で遊ぼう」「おいしい五名」と書かれたお洒落なパンフレットには、五名の豊かな食材や伝統的な加工品、イベント等が満載だ。商品の一部は通販でも販売されるようになった。

山村里クラブ有志による「山村プロジェクト」が取り組んでいるのが雑木林の整備と獣害対策として実施されているイノシシの捕獲と食用への活用。狩猟免許を持った人が12月



▲毎週土曜日に開店する「ふるさとの家」

▼「五色の里」、木村京子さんと愛犬



3月までイノシシを適正捕獲し、保健所認定の調理施設で加工・保存・販売を行っている。深い森の集落「五色の里」に木村薫・京子さんを訪ねた。山の天辺の古い歴史を持つ家で、2匹の猟犬が迎えてくれた。イノシシ肉の販売と料理が得意で、ご夫婦で狩猟免許を持ち、捕獲したイノシシは近代的な加工施設で処理する。「野生のイノシシ肉はDHAやEPAという高度な不飽和脂肪酸を多く含んでおり、動脈硬化や痴呆予防にもいいと言われています」と京子さん。最近では里山に多く出てくるイノシシを適正駆除するため、家の周辺を駆け回るイノシシの姿は大幅に減ったと言う。冷凍保存した肉を見せていただいたが、ボタン肉といわれるように何とも美しく、味も大変美味である。山間部を生かして自然薯や栗栽培も盛んだそうで、かつて日本人が森で豊かに暮らしていた時代を彷彿するひと時であった。

●五名活性化協議会
☎0879-291-2832（ふるさとの家）

新鮮野菜を子供たちに、「ふるさとランチ」

〔田幸ふるさとランチグループ〕

みよしし
広島県三次市



▲田幸小学校主催、児童たちが農家の人を招いて「感謝の集い」

三次市では平成15年から学校給食に地元の農産物を取り入れた「ふるさとランチ」事業等の食育推進計画に取り組みはじめたが、食料の安定供給のむずかしさや価格等の問題で、継続が不可能になっていた。

それに対して田幸地区では、生産者が中心になって「せっかく始めた地産地消の取組みを辞めてしまうのはもったいない」「地域の子供たちに自分たちの作った野菜を食べてもらいたい」と強く訴え、平成17年に住民自治組織である田幸地区町内会連合会の承認・協力を得て、「田幸ふるさとランチグループ」を結成した。

広島県の北部に位置する三次市田幸地区は、1490人、580世帯が暮らす自然豊かな



▲野菜をたっぷり使った学校給食の一例



▲毎朝共同給食調理場へ野菜を届ける農家



▲「感謝の集い」の一幕

中山間地で、四季折々の野菜の宝庫。農業に熱心に取り組む農家が多い。しかし「ふるさとランチ」を行うためには、学校給食に使用する安全で新鮮な野菜を安定的に栽培・供給する体制が必要である。そのため、生産者同士で野菜の栽培法を教えあったり、講師を招いて研修を行う等して、生産体制の整備と強化に取り組んだ。

食材を届ける先は、4地区の小学校の給食を手掛ける田幸共同調理場で、毎日330食分を調理している。田幸小学校(児童数約100名)に隣接した場所にある。

「田幸ふるさとランチグループ」では、学校給食に必要な食材を年間通して届けるための生産体制の整備と強化に取り組む。毎朝新鮮な野菜を調理室に直接届ける運営を10年にわたって実施してきた。

地域食材の使用比率は約57%という驚異的なものになっており、地元の野菜をふんだんに使った給食は愛情満点、栄養満点で、子供たちにも好評だ。

「作る人の顔が見える新鮮で美味しい野菜が届きますので、調理にも張り合いがあります。秋には梨やぶどうの果物も届くので、子供も楽しみにしています」と給食係の人が語っていた。

また、この活動により、田幸小学校では、子供たちが学校に生産者を招いて「感謝の集い」を行ったり、子供たちが生産現場へ出かけて農業体験をする等の交流会も行なわれている。子供たちの地域への愛着心への醸成につながっており、また生産農家は、家族も協力するなど生産意欲が高まり、生きがいが出たと話す。

今後は、農家の高齢化や後継者不足等の課題があるが、地区全体で農業振興をはかり、学校との連携を強めていく予定で、他地区でも「ふるさとランチ」を検討する気運が高まっているようだ。

●田幸ふるさとランチグループ

「田幸」ミニコミュニティセンター内」

☎0824-66-1162

会津材を生かした暮らしの提案「IORI倶楽部」

〔一般社団法人 IORI倶楽部〕

福島県三島町



▲コンセプトハウス「つるのIORI」

地域の山から産出した木材を最大限に活用して、地域の育林家や建築家、住民が幅広く連携しながら、新しいライフスタイルの提案、都市住民との交流、会津地方の自然と歴史文化の継承をはかっていこうと組織されたのが一般社団法人IORI倶楽部。

「IORI」（いおり）とは、漢字で「庵」と書き、古来は草木や竹等を使って作った質素な小屋、農作業用の仮屋などを言うが、現代的には都市郊外や里山での簡素な暮らしを支えるための木材や自然素材で作ったシンプルでコンパクトな住居を指すと、「IORI」創刊号で佐久間建設工業(株)社長の佐久間源一郎氏が述べている。

IORI倶楽部を設立したのは奥会津地方の林業家らと製材、設計、大工等の建築関係

IORIが提案する家は、地元の木材を使ったシンプルだが多目的に使える木造住宅で、建築費をできるだけ抑えて提供することをめざしている。同会発足について佐久間社長は「奥会津の木材は品質がいいのに、節があるからと安い価格で取引されることが多かった。それなら逆に、節のある木を上手に使うことで安価で品質のいい家を提供しよう、山で働く

社(者)約30人。現在は農家やモノづくり職人、教師、専門家やアーティスト等多様で多彩な考えを持つ人たちが連携し、地域の人々の持続可能で豊かな暮らしの実現「時代を切り開く新しいライフスタイルの創造」をめざして活動している。

具体的には、会津材の特色と地元の伝統技術を生かした木造コンセプトハウスの設計・運営、古民家をシェアオフィスとして再生し、中山間地にベンチャー企業の進出を図る、定住を促進する等、個々の専門性を生かしながら過疎地域の活性化に取り組んでいる。特に経営的な発想と企業ネットワークが特色といえる。

三島町をはじめとする奥会津地方は、森林面積の割合が高いが、当該地区を含む県内の林業就労者は20年間で6割も減少。また三島町の空き家は約100軒あり、空き家率は各地で増えている。

このような状況の中、IORI倶楽部では、奥会津の山力を生かし里の生活を支えるため、独自の板倉工法でモデルハウスとなる交流スペースを地元温泉の脇に設置（「つるのIORI」）、様々な人が語り研修する場になっている。古民家のリノベーション事業では、東京のIT企業が進出、さらに都市住民が長期・短期間滞在する家も出来、地域との交流機会が増えている。



▲アーティストとのワークショップ。農家や地元建築家等との交流が盛ん



▲樹齢100年の杉を伐採する一般の人を対象にした見学会

人が森を保全していけるようにしたい」と語っている。同倶楽部では「IORI」という活動を紹介する情報誌も発行しており、コンセプトは「会津の山力で都会の暮らしを応援する」。8号となり、現場を熟知した専門家たちの提案と活動が、田舎に関心を持つ都市住民からも注目されているようだ。

●一般社団法人IORI倶楽部
TEL02468-9643

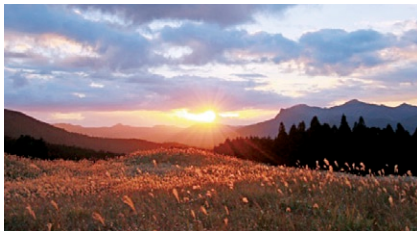
全国過疎問題シンポジウム 2016 in なら 平成28年10月13日(木)～14日(金)

訪れたい、住みたい、住み続けたい地域 ～過疎地域で幸せな暮らしに出逢う～

10/13 全大会 & 交流会 橿原市 かしはら万葉ホール

- 13:00 開会式 開会宣言(主催者挨拶、歓迎挨拶)
13:20 平成28年度過疎地域自立活性化
優良事例表彰式
14:05 基調講演
「一枚の葉っぱから生まれた幸せ
～居場所と出番づくり～」
横石知二氏(㈱いるどり代表取締役)
15:25 パネルディスカッション
「訪れたい、住みたい、住み続けたい地域
～過疎地域で幸せに出逢う～」

「コーディネーター」
政所利子氏(㈱玄代表取締役)
[パネリスト] 五十音順
塩見直紀氏(半農半X研究所代表)
藤山 浩氏(島根県立大学連携大学院教授他)
松田麻由子氏(伊那佐郵便局長)
水本 実氏(東吉野村長)
横石知二氏(㈱いるどり代表取締役)
17:30～19:00
交流会(かしはら万葉ホール レセプションホール)



曽爾高原の夕焼け

10/14 分科会・現地視察 五條市、曾爾村、天川村、川上村

各9:00受付開始 10:00～16:30解散予定

五條市分科会 西吉野コミュニティセンター

- ・過疎地域自立活性化優良事例発表会
「コーディネーター」
関司直也氏(法政大学現代福祉学部福祉コミュニティ科教授)
[現地視察]・五條総合体育館
・藤岡家住宅

曾爾村分科会 国立曾爾青少年自然の家

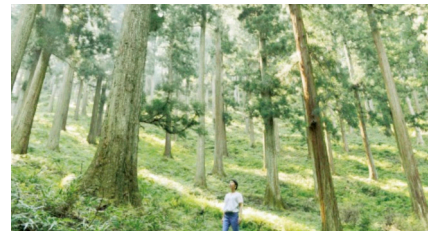
- ・パネルディスカッション
「田舎は宝の山だ!」
「コーディネーター」
斉藤俊幸氏(インク総合計画㈱代表取締役)
[パネリスト] 五十音順
有江正太氏(空き家コンシェルジュ代表理事)
小関康嗣氏(美山里山舎代表理事)
芝田秀数氏(曾爾村長)
立花弘晶氏(曾爾村観光振興公社営業部長)
[現地視察]・曾爾高原
・曾爾高原ファームガーデン

天川村分科会 天川村立天川小学校体育館

- ・パネルディスカッション
「山癒の里からメッセージ」
「コーディネーター」
竹本吉輝氏(㈱トビムシ代表取締役)
[パネリスト] 五十音順
角谷甚四郎氏(天川村洞川財産区議会議長)
車谷重高氏(天川村長)
松井賢一氏(滋賀県湖北農業農村振興事務所副主査)
山口貴義氏(南山口農園代表取締役)
[現地視察]・天川大弁財天社
・てんかわ天和の里

川上村分科会 川上総合センター

- ・過疎地域自立活性化優良事例発表会
「コーディネーター」
宮口伺迪氏(早稲田大学教育・総合科学学術院教授)
[現地視察]
森と水の源流館、樹齢280年の人工林、匠の聚



スギ人工林(川上村)

編集後記

▼伝統産業を継承するためには、時代に合った改革も必要だ。変えることは痛みや軋轢が生じることがある。「五箇山和紙の里」の改革が成功しているのは、ひとえに“人の和”だと感じた(R)
▼伝統的な商品、作品を作る現場には、作り手さんたちの真剣で充実した時間がみなぎっていた。原材料の収集から加工、制作の長いプロセスなど、一点が完成するために長い時間と労力が必要かを改めて実感する取材であった。技術を学ぶ研修会には若い人の参加も増えている。貴重な伝統工芸品や伝統技術を継承していくために私たちにできることは、関心を持ち、購入すること。森や自然の命、作り手の想いと技術を結集した品物が身近にある心地よさ。これを情報に翻弄されている若い人に、どう伝えていけるか、知恵を出し合っていきたい(A)

De POLA No.48

【でぼら】2016年

発行日/平成28年10月5日

発行/全国過疎地域自立促進連盟

〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目13番5号

第一天地ビル3階

☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

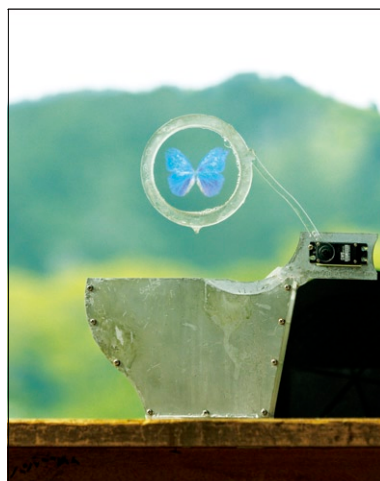
<http://www.kaso-net.or.jp/>

編集/㈱編集工房アド・エー

茨城県北地域を舞台に繰り広げられる現代アートの祭典

KENPOKU ART 2016 茨城県北芸術祭

KENPOKU
ART 2016
茨城県北芸術祭



落合陽一 《コロイドディスプレイ》2012/2016

11月20日まで、茨城県の県北地域6市町の風光明媚な海と山を舞台にした、初めての国際芸術祭を開催中です。「海か、山か、芸術か？」をテーマに、美術館だけでなく、自然の中や、商店街、廃校、歴史的

建造物を活用して、国内外の多くのアーティストが様々な作品を展示しています。参加アーティストや会場アクセス、モデルコースなど芸術祭の見どころをHPでお知らせしておりますので、ぜひご覧ください。また、これらの時期は紅葉シーズンを迎え、美しく彩られた風景とともに新そばの収穫を迎える常陸秋そばなどのグルメやりんご狩りなども楽しむことができます。この秋は、茨城県北芸術祭に越しいただきアートと一緒に地域の魅力を感じて下さい。

- 会期:平成28年9月17日(土)~11月20日(日)
- テーマ:海か、山か、芸術か?
- 総合ディレクター:南條史生(森美術館館長)
- 開催市町:茨城県北地域6市町
日立市、常陸太田市、高萩市、北茨城市、常陸大宮市、大子町
- 主催:茨城県北芸術祭実行委員会
- 作品鑑賞パスポート
一般:2500円/学生・高齢者:1500円

茨城県北芸術祭

検索

<http://www.kenpoku-art.jp>

[DePOLA] Back Number (近刊号)

No.40 夢を紡ぐ——地域伝統のものづくり職人



大館曲げわっぱ(秋田県大館市・栗久) 南木曾「木地師の里」(長野県南木曾町・野原工芸) むらかみ町屋再生プロジェクト(新潟県村上市) 三津谷煉瓦窯再生プロジェクト(福島県喜多方市) 伝統の切れ味、土佐打刃物(高知県香美市土佐山田町) からむし織の里(福島県昭和村) い草の育成とゴザ織り(熊本県八代市) 三好お札の里(徳島県三次市池田町) 縮れ穂先を編み上げる南部箒(岩手県九戸村・高倉工芸) 秋山郷が育む猫つぐら(長野県栄村) アイヌ文化を未来へ伝える(北海道平取町二風谷)

No.44 人々が集って、はじめる——ふるさと再生作戦



「美味しい」の感動をつなぐ島(山口県周防大島町) 貴重な動植物と農業青年を育む里山(鳥取県日南町) 四ヶ村の棚田と時折温泉で創るふるさとのにぎわい(山形県大蔵村) 主役は子供たち(福島県伊達市月舘町) 馬にふれ、馬たちの時間で暮らす(北海道浦河町) ボランティアが続ける森や里山支援 / (JUON NETWORK 森の楽校 田畑の楽校) 産学官でオホーツク地域産業の創成を(東京農大オホーツク実学センター) 平成25年度過疎地域自立活性化優良事例 / 民家は地域資源、リフォームして定住促進へ「奥矢作森林塾」(岐阜県恵那市) 生姜栽培を復活して開拓碑を受け継ぐ(鹿児島県西之表市) 雪浦ウイーク(長崎県西海町) 奇る会がまた(熊本県水俣市) 若松ふるさと塾(長崎県新上五島市) 会津山郷そば協会(福島県喜多方市)

No.41 これが自慢の味・風土・人——地域ブランド作戦



生いもこんにゃく NO.1(群馬県東吾妻町・小山農園) 450年の歴史を経て、西海えだおれなす(長崎県西海市) 飼料用米生産と「こめ育ち豚」(山形県遊佐町) 森を救う家具「ニシアワー」(岡山県西粟倉村) 京丹波の伝統作物(京都府京丹波町) 山里文化を語り継ぐ「遠野物語」の里(岩手県遠野市) 富良野ラベンダーの里(北海道中富良野町) 米蔵・しおまち唐琴通り・須恵器(岡山県瀬戸市内牛窓) 「森の香菖蒲ご膳」(佐賀県富士町) トキと暮らす郷(新潟県佐渡市) 特別ルポ / 東日本大災害・災害地からの報告

No.45 地域の創造活動を支援する



集落再生をめざす小さなコートピア郷 / 大宮産業・みやの里(高知県四万十市西土佐) 移住してくる家族をバックアップ(長野県伊那市高遠町) 地域で安心して暮らす / ゆうばりコンパシオ構想(北海道夕張市) 各分野の専門家が地域に根を張って / 対馬市島おこし協働隊(長崎県対馬市) 自然と地域の中で輝いて学ぶ「島留学」 県立隠岐島前高校、島まるごと図書館プロジェクト(島根県海士町) 学生の提案をビジネスに生かす / 十日町市「トオコ」、農業体験・ボランティア活動に無料バス(新潟県十日町市) 風土に合った「小さな農業」の創出(山形県形町) 山里の暮らしの知恵と資源を生かして / もくもく市場 橋尾里人塾(岐阜県郡上市明宝) 地域の見守り役も担って / 予約型乗合タクシー(福岡県八女市)

No.42 新たなコミュニティの実践——農山漁村の再生



中山間地域の住民をサポートする(高知県仁淀町・越知町・いの町) スキー場跡地に森林を復元(長野県長和町) 天草漁師の「ひと網オーナー制度」(熊本県天草市有明町) 油屋・万屋・車屋を地区で運営(広島県安芸高田市川根) 「元気かい! 集落応援プログラム」(和歌山県田辺市) 協力隊から起業・就職(北海道喜茂別町) 女子大 OB 生の田舎暮らし & 地域おこし(茨城県常陸太田市) 村立おといねっぴ美術工芸高校(北海道音威子府村) [自然エネルギー利用] 観葉植物栽培日本一(鹿児島県指宿市) 環境モデル都市(高知県橋原町)

No.46 若者の地域貢献活動



島の柑橘園を受け継ぐバンドマンたち(愛媛県松山市中島) 農を軸に「生きがいの仕事作り」/ 学生耕作隊(山口県宇部市) 高根の暮らしを明日へ繋ぐ / 共存の森ネットワーク・キャンブループ(新潟県村上市) 450年の子供たちの第二の故郷 / 暮らしの学校だいでらぼっち(長野県泰阜村) 奄美大島他で大学生が「島キャン」 休耕地を花と蜜蜂の丘に / 油木高校(広島県神石高原町) 地域の農業と共に / 名久井農業高校(青森県南部町) 道北農業の未来を担う / 北海道名寄産業高校(北海道名寄市) 若手漁師や「笑顔食堂」が地域の活力(三重県尾鷲市早田町) ふるさとへもんでこい! 熱烈ラブコール(徳島県那賀町)

No.43 Iターンして新規就農——地域に農の新しい風



担い手を育成して地域活性化(大分県由布市内町、豊後大野市) 河岸段丘は命と恵みの大地(新潟県津南町) 「南郷トマト」の若い担い手(福島県南会津町) 農家の心意気をニューファーマーに(北海道士別市朝日地区) 自家製レモンで大三島リモンチェッロ(愛媛県今治市上浦) 「農業をする」という人生の作り方(岩手県西和賀町) 地域の産直市「お山の大将」(徳島県美波町) 休耕地にしない・親子で米作り(広島県庄原市総領) むかし味「げんたの野菜」(山梨県笛吹市芦川) 高原を彩るヒマラヤの青いケシ(長野県大鹿村) 環境未来都市しもかわ(北海道下川町)

No.47 ソフト事業で 地域ステップアップ



豊饒な大地から「美味しい」発信、ブランド作物&グルメの里(青森県つがる市) 人、モノ、想いが行き交う交差点「こってこていけだ」(福井県池田町) 男鹿の魅力をパワーアップ、減農薬栽培と放棄水田の活用(秋田県鹿角市) バイオガスプラントの余熱利用、チョウザメ、マンゴークウ(北海道鹿追町) 全国が熱い視線を注ぐ「日本一の子育て村」(島根県邑南町) 地場産業・伝統技術を継承する、小学生の「たたら体験学習」(島根県奥出雲町) 作って、食べて、歩いて実感、山の暮らしをナビゲート(山梨県笛吹市芦川) 暮らしの中で街並み保存と資源活用、北国街道今宿(福井県南越前町) 海の道・神々の島、老枝市立「支国博物館」(長崎県杵崎市) 駅舎は若者や町民活動の発信地「えきまちネットこまつ」(山形県川西町)

★詳しい内容については <http://www.kaso-net.or.jp> を参照ください。残部が少ないため進呈出来ない号もあります。